
星くずレッドサマー

ジェロニモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星くずレッドサマー

【Nコード】

N8315H

【作者名】

ジェロニモ

【あらすじ】

「大人のくせにだらしねーな！あたしらが背中を押してやるよ……！」

傷つき、居場所を失った大人が集まる「星くず学園」を守るため、緋色の髪をなびかせた学ラン姿の美少女・シュカが吠える！秋葉原の片隅で、自信が持てない若手オタリーマンと、美少女5人の「応援団」が織りなす、暗くて熱い学園戦記。……もう一度、学生生活を送れるなら、あなたは何を選びますか？

プロローグ

シュカは、時間とともに腫れてきた右拳をさすっていた。

学校指定のスカートに、小さな赤い点が飛んでいるのを見つけて、ため息をつく。

遅刻したせいか、シュカの席は体育館の一番うしろの席だった。4月にしては日差しが暖かいせいか、上着をひざに置いている生徒が目立った。

マイクを通して、生徒起立、という声がかかった。号令なんてものを聞くのはいつ以来なんだろう、と思いながら、シュカはパイプ椅子から音も立てずに、細い腰をあげた。

目の前に並ぶ、いろんな頭が一斉に礼をする。流行りの髪型やら金髪やら、オタクっぽい長髪やら、すでにさみしくなった後頭部たち。およそ60人、男女比は半々だろう。

——危険そうな奴はまだ見当たらない。いや、アイツとアイツはなんかやってたな。格闘技？

シュカがいつものように「索敵」を行っていると、いつの間にか壇上にあらわれた、背の高い老人が、マイクに手をかけるのが見えた。着席、の声がかかり、ふたたび学生達がパイプ椅子を鳴らす音がした。

「えー、星くず学園、入学、おめでとう。理事長のマキシマです。」

鶴を思わせる、長い首をゆっくりと前後にゆらしながら、理事長

が話しはじめた。シユカも入学前に一度会ったことがある。今年で80歳とかなんとか、食えないやつだ。

「今年はありがたいことに、桜の開花がずれこんで、入学式までもってくれました。え。きみ達が桜を見るのは、何回目のことなんでしょう。もちろん、20回は見ていることでしょう。」

——そう、ここにいるのはどいつもこいつも立派な「おとな」だ。20歳を超えた「おとな」の群れ。その中にいる自分に気づき、シユカの行き場のない苛立ちがまた強くなる。

「え、きみたちは、この学校に来るまで、いろんな春に出会ってきたことでしょう。思い通りに行かずに泣いた春だったかもしれない。立ち止まって周りの人を見送るだけの春だったのかもしれない。」

老人独特の乾いたふるえる声は、力強くはないが、どこまでも優しい響きで体育館に広がる。シユカは落ちつかない気持ちのまま、去年の桜を思い出そうとした。

——アジトの近くを流れるドブ川の水面を、びっしりと覆いつくした白い花卉。あれは桜だったっけ？ 敵対するチームとのせんめつ戦の末期、優雅に花見などをしていなかったのは確かだ。

「……ですが今日、この日からの3年間は、きみたちが失った『青春』という時間を取り戻してほしい。それだけがこの学園の方針です。」

マイクごしの理事長の声に、わずかに熱がこもるのを感じて、シユカは目を上げた。

「知っての通り、この学校には、『部活動と放課後』しかありません。先生もいません。そのすべてを、きみたちの手で作ってほしい。学校生活をどれだけ楽しくするのかは、きみたちの手にかかっています……」

青春、部活動、放課後。

今日までのシュカの周りにあった、血と暴力、謀略ということばとは次元が違いすぎる。

——やっぱり引き受けるんじゃないかった。今から逃げだすってのはありなのか。かと言って戻る場所があるわけでもない。シュカは何度目かの深いため息とともに、左手で制服のネクタイをだらしくゆるめた。

つと、シュカのとなりで、パイプ椅子のきしむ音がした。遅れて到着した生徒らしい。

中庭の桜の木からくつつけてきたのだろう、ふんわりした髪と制服のスカートから、白いはなびらが舞い散る。

世間ずれしていないとでも言うか、どこことなく育ちの良さを感じさせる。どーせ校門の桜の下でぼーっと突っ立ちでもしていたんだろう。シュカの視線を感じたのか、女子生徒は怪訝そうに見返すと、小さな声を出した。

「やだ、なにかついてる？」

無防備な質問に、シュカは思わず答えを返していた。

「……ああ、花見ができそうなくらいだ」

自分の姿に気づいた女子生徒が、わたわたと体中をはたきだす。

たくさんのお花が足下に落ちた。……変わったやつ。シユカははなびらを避けるように、反対側へと体をかたむけた。

女子生徒は、ふと手を止めると、まじまじとシユカの右手をのぞきこんだ。

「あなたの服にも、なにかついてるわよ。ケチャップ？」

シユカはどう答えるべきか、迷った。結果、ありのままを言った。「出がけにケンカを買ったんだ。あたしの制服姿を指さして笑ったヤツから」

シユカの説明をどうとらえたのか、隣の女子生徒は口をぽかんとあけている。同じ年くらいだろうか。

「……ほんとにいろんな人がいるのね、この学園ときたら」

女子生徒は、そうつぶやきながら、シユカの男の子のような短い髪から、黒いニーソックスにつつんだ足下までを何度も見回した。

相手に情報を与えてはならない、そう叩きこまれたシユカの体がこわばりだす。だが女子生徒の瞳の中にあるのは、小さなこどもが初めて海に触れるかのような表情だった。シユカは、気づかれないようにそっと力を抜いた。

「まあね。あんたこそ、いいところの『お嬢』っぽく見えるけど、やっぱ訳ありなのか」

「ええ。学校生活はほとんどはじめてよ」

彼女がにっこりと微笑んだ。周囲の空気がほんの少しだけ明るくなったのは気のせいなのか。

「わたしはありす、あなたは？」
「シユカ」

「不思議なひびきの名前なのね……どんな字を描くの？」

シュカは人さし指で、ゆっくりと空中に字を書いてやった。ありすがにっこりと笑う。

「とってもいい名前ね。ね、あたし、あなたに会えてほんとにうれしいの。信じる？」

シュカは首をふった。が、まったく信じていないわけではなかった。ありすにつられるように少しだけ口が軽くなるのを感じる。

「ありすちゃんね、おまえそーとー変わってるよ。つーかヘン」

「そう？ まじめな気持ちで言ってるんだけどなあ。ね、ともだちにならない？」

「あたしが、あんたと？」

大きな声にまわりの生徒の視線が集まる。ありすが声をひそめた。

「そう、きっと仲良くなれると思うな。わたしたち」

仲良し、そんな言葉はシュカの辞書には乗っていない。

断ろうと思った。鼻で笑ってやろうと思った。だが、口から出た言葉は、

「……考えてみるよ。」

ありすの顔が、ぱっと輝く。

「よかった！ ね。もうクラブは決めた？」

「クラブ？ ああ、部活ってやつか。いや、あたしは入らないんだ」「どうして？ クラブ活動は必須じゃなかった？」

「んーとさあ、あたしは、条件つきの特待生なんだよ」

「えー！ そんな人がいるの？ すごいじゃない！ 条件ってなんなの？」

「聞いたら、笑うぞ」

「笑わないから。ぜったい」

「お、応援団を作ってよ、この学園を守ること。って、やっぱ笑ってんじゃねーか！」

真っ赤になったシユカと、ありすとの間に、マイクを通した理事長の声が割りこんだ。

「え、そのふたり、もう仲良くなったのかな、いいことです。え、もうすぐ話が終わるから、ちょっとだけね、がまんしなさい」

「……はい。すみません」

ふたりの返事がきれいなユニゾンを奏でると、周囲から軽い笑い声がおこった。

第1話..かつて知っていたもの

(あれ……こんな街だったっけ……?)

八月のおわり。

タケオの目に映った夜の秋葉原は、まるで知らない街のように見えた。

金曜にしては数の少ないタクシーが、光を引いて闇の中へ消えて行く。

かつてタケオも良く足を運んだ家電量販店の要塞も、二次元の少女が微笑む迷路も、その数を減らしてシャッターを閉ざしている。あれだけまきちらされていた、まばゆい光と物欲という魔法はどこにも見えない。

持ち主が捨てていったのだろう、壊れたビニール傘が路上のあちこちに転がっている。砂浜に打ち上げられたクラゲのことを考えながら、タケオは携帯電話の時計を見た。午後十時過ぎ、早めに会社を出たつもりだったが、待ち合わせの時間は過ぎている。

ふと横を見ると、暗いショーウィンドウに映った自分が、タケオを見ていた。

セルフフレームのメガネに、長くもなく短くもなければコシもない黒い髪。

二年使っている肩かけカバンの中には、持ち帰り仕事用のノートPCがある。

すれ違った瞬間に忘れられてしまいそうな、中肉中背のスーツ姿の若手オタリーマンの典型。ステータスは「疲労」と「空腹」だ。

何度も携帯電話に保存した待ち合わせ場所の地図を確認してから、駅を背にして歩きだした。

パトロール中の二人組の警官をよけるように追い抜き、若いホームレスとぶつかりそうになって飛びのく。銀行の角を曲がると、一層街の光が少なくなつた。駅から離れるほど、人通りが減つていくのが目に見えてわかる。再び大通りにぶつかった所で立ち止まると、タケオはあたりを見回した。

およそ500mほど先に、目印の水色の歩道橋があつた。

側面には、治安の悪さを感じさせるグラフィティ的な落書きが目立つ。かつてはこんな文化からは100万年光年も離れたオタクの聖地も、ずいぶん変わってしまったらしい。

就職してからぐんと悪くなつた目を細めると、歩道橋の上に待ち合わせの相手らしき人影が見えた。

(……あいつと会うのはどのくらいぶりなんだろう……)

小さな人影が、タケオに気づいたように軽く手をあげた。

タケオは歩道橋の階段をゆつくりと登る。万年運動不足の身には、この程度でもちょっとしたハイキングなみだ。

歩道橋の上は少しだけ涼しい。昼間の雨風で空がきれいになったのか、珍しく星空が見えた。下の大通りの両脇に植えられたイチヨウ並木からは、都市部で増えつつけるアオマツムシの鳴き声が聞こえていた。

通路の真ん中に立つ人影は、明るい声を出した。

「久しぶりだね、おにーちゃん」

「……なんなんだそのカッコウは……チィ」

タケオはため息をつきながら、制服姿に身をつつんだ妹の名を口

にした。

「お前、もう二十歳こえてんだろ。なんで学生服着てるんだ？」

「ふふーん。まだ似合うでしょ？」

くるり、と歩道橋の上でチィがポーズをとってみせた。

タケオと同じ場所から二年遅れで生まれた、血のつながったバカ。二ヶ下の妹だ。

グレーのチェックのスカートと、夏用シャツにえんじのネクタイ。肩までの黒い髪に黒いハイソックス。

実年齢を知らなければ、現役の高校生に見えないこともない……のか？

妹の表情は、数年前よりはるかに明るくなった気がした。女性らしい化粧なんかにも気をつかっているようだ。

「それより、話ってなんだよ。……実家だったら帰らないよ」

おとしの正月らしい、親と顔を会わしたことはなかった。こうして妹と口を聞くのも覚えていないくらいひさしぶりだ。タケオは、ノートPCを入れたバッグを地面に下ろすと、歩道橋にもたれかかって大通りに目をやった。一台の軽ワゴンがハザードを出して路肩に止まるのが見えた。

「おにーちゃん三連休ヒマ？」

「あいにくと自宅待機だよ。新しいシステムのエラーが出たら、すぐ駆けつけられるように」

「忙しいんだ……」

「チィは、なにしてんだよ。今」

タケオはようやく妹の方に顔をむけた。

第2話：すれちがうもの

チイは、きれいに切りそろえられた前髪の下から、真っすぐにタケオを見つめていた。

「……学校に行ってる」

「まじで？ 20歳で、ひょっとして…また高校か？」

「高校じゃない。一応、通信で卒業しているし」

チイは、高校を一日行っただけで不登校になった。

親はなだめたりすかしたり、ビョーインに連れて行ったりとそりゃー大騒ぎだった。たしかその後も、フリースクールに入学しては辞めたり、バイトを始めては辞めたりをくり返していたと聞いているが、まさかまた学生とは……。

「おにーちゃん、ずっと同じ会社で働いてるの？」

「まあね。ほかに行くところもないし」

タケオ自身は、SE系の専門学校を卒業後、就職と同時に家をでた。引越の朝、チイの部屋に声をかけようと思ったが、結局やめたのをおぼえている。それから戦後最大最長と言われるフケーキの中、末端技術労働者として生きていた。

しばしの沈黙のあと、チイが口を開いた。

「でね……この日曜日にその学校の文化祭があるんだ」

「チイもなんか出すのか」

「うん。彫刻というか、ぜんぜんそんなちゃんとしたヤツじゃないんだけど」

彫刻……まだあきらめてなかったのか。胸の中でなにかがざわりと動いた。

「ふーん、すげーじゃん」

「……あと少しで完成なんだけど、作れなくなっちゃって……」
「なんで」

チィは背中後ろにまわしていた右手を見せた。

薬指と小指をおおう、水色のギブスに白い包帯が、常夜灯に浮か
び上がる。

「ちよつとドジっちゃって。そんなにひどくはないんだけど、明日
の夜には完成させたいの……それでおにーちゃんに手伝ってほしく
て」

「……」

「おにーちゃんモノつくるの上手だったじゃん。ムカシっから。ア
タシなんからよりずっと……」

「ことわる」

思わず大きな声が出た。

体の中は、すでに黒いマグマのような気持ちでいっぱいだった。
チィの言葉はきっかけにしか過ぎない。昼間に会社で押しつけられ
た理不尽な仕事や、断りきれなかった無力感がごたまぜになって炎
上するのがわかった。

「オレは忙しいんだ。学生の遊びなら友達にたのめよ」

みるみるチィの顔がこわばっていくのがわかる。

「オレがこんだけ働いてボロボロなのに、お気楽に文化祭だって？
ずいぶんいい身分じゃないかよ」

言ってる最中にしまったと思ったが、止められなかった。

チィは、さわってはいけないものに触って、しかもそれに毒針が
あったことを忘れていたような表情をうかべていた。

さっきまでの明るさはどこかへ消えてしまったようだ。チィのふ
るえる声が夜空にひびく。

「そうか、そうだね。みんなはたらいしてるんだもんね。はたらい
てるひとはえらいんだよね……だれにもたのめないから、いってる

んじゃないかよ……」

「……チィ」

「ばか！ もうたのまない！」

チィが唐突に背を向けて、駅とは反対側の階段へ走りだした。

追った方がいいのか、だが追いついてどんな言葉を言えればいい？

傷つけたことはわかっていたが、謝りたくはなかった。タケオの頭の中で自分の言葉とチィの言葉が、わんわんと鳴っている。

チィの小さな背中が見えなくなった。階段を降りる足早な音がひびく。

タケオはのろのろとカバンをひろって、駅の方へ体を向けた。

その時だった。

歩道橋の下から、バンツと何かが炸裂する音と、ヤツという短い悲鳴が聞こえた。

タケオはふり返ると、チィの姿を探すために走りだした。単純に階段で転んだのか、チカンにでも出くわしたのか。とにかく追いかける口実はできた。いつだって誰かに迷惑をかけているバカな妹。チィが降りていった階段の手すりにふれた瞬間、タケオの目に飛び込んできたのは、階段の一番下の段に転がるチィの姿と、背中を踏みつけながら嬌声をあげる、見知らぬ男たちの一団だった。

「はい、星くずゲッター！」

一人が、笑顔でこぶしを突きあげた。

歩道橋の下にひろがる光景は、タケオの知っている世界のものではなかった。

第3話：害をなすもの

タケオは、一番上の階段に棒立ちになって凍りついていた。チイは意識を失っているのかぴくりともしない。

小山のようなでぶが、人形遊びでもするようにチイの髪をつかんで持ちあげる。金髪の若い男がチイの顔をのぞきこんで、再び大声をあげた。

「おーいおいおい、またこの女っすよ。ついてねえなあ」

「なにしてんですかあっ」

タケオの口から、悲鳴のようなひっくり返った声が出た。集団がいつせいにタケオを見つめる。まだ若者という言葉が似合う五人の集団。高校生くらいのヤツもいる。リーダー格らしい先頭に立つ男ですら、三十歳はっていないだろう。共通しているのは、どの男の瞳も、暴力の興奮でぬれた光を放っていることだ。

ヤンキー風でもヤクザみたいな格好でもない。全員が特殊部隊のような黒いベストを着て、カーゴパンツのすそをブーツに入れている。胸には『侍』の一字が入ったお揃いのワッペン。

タケオに気づいた男がひとり、チイをまたぐようにして、階段をあがってきた。

なんなんだ？こいつらは……急に恐怖心があふれて、足がぐぐくとふるえだす。

赤いフレームのメガネをかけた、長身の男が目の前に立った。ゆるいパーマをかけたロングの髪を頭の後ろで結んでいる。筋肉質のしなやかな体つきに大きな手。顔だってムダに男前だが、薄い笑みを浮かべたその表情には、どこか欠落したものを感じた。男がやや間のびした明るい声を出す。

「きみ、サラリーマン？」

なんだ……どんな答えが正解なんだ？ タケオはとっさに返事が出でこず、沈黙を返した。向かい合った赤メガネはちいさく口笛を吹くと、背中から六十cmくらいの黒い『刀』をまっすぐに引きぬいた。

タケオのノド元に、やや丸まった刃先が突きつけられる。木刀や竹刀の半分くらいだが、殴られれば骨くらい折れるかもしれない。そう思ったタケオの目の前で、刀身が青く光りだした。

ぱちっ、ぱちっ、フライを揚げる油のような音を立てながら、みるみるうちに輝度と明度が上昇する。空気を焼くような電気の匂いがした。

気がつくと、タケオは首をいっばいにのけぞらして、何度も縦にふっていた。光る刀をにぎるメガネの奥からのぞく目が、タケオの頭からつま先までを丹念にながめ、満足したように刃先を遠ざけた。

「じゃあ、私たちの敵じゃありませんね。ぜんぶ忘れて、橋のむこうへ帰りなさい」

見たこともない武器だった。おもちゃにしては凶悪すぎる。まさかあれでチイが……！

さあ早く、と言われて我にかえると、チイが男たちの手で、乱暴に引き起こされるところだった。これから何がおこなわれるのか。恐怖をとまなつた妄想をかき消すように、タケオは震える声をあげた。

「……チイをかえしてください」

階段をおりかけていた赤メガネが振りかえる。

「どーいうご関係？」

「……妹、です」

「諸君らの意見は？」

赤メガネが、階段下の四人に声をかける。

「て、天誅」

小山のようなでぶが、ぶしゅうという息とともに、言葉を発した。小柄な金髪がへらへらと笑いながら続ける。

「蟲の家族ってのははじめてっすね。警察にたれこまねーよう、ぶっちめときましよう」

隣の黒いニットキャップの男と、はげあがった男が頷く。いやだ。こいつらはなんだ。

「じゃ、そーゆーことで」

赤メガネが、タケオの方に向きなおる。逆手に握った青い『刀』が、きれいな軌跡を描くのが見えた。タケオは、とっさにPCを入れたカバンで体をかばっていた。

青白い閃光が視界を奪い、パキッという破裂音が胸元でひびいた。一拍遅れて全身をつらぬく衝撃が走る。髪の毛が逆立つのがわかる。五歳の時、親に隠れてコンセントにクリップを差しこんだ時のことを思い出した。あの時は、となりで見ていたチィが泣きさけんだので、タケオは泣くヒマがなかった。あれから十七年、恐怖と電撃の痛みがタケオの体から自由を奪うのに、半秒はかからなかった。

「直撃はしませんでしたかー。意外と反射神経いいですよ。おにいさん」

近距離から赤メガネの声が聞こえた。その場でしりもちをついたタケオの胸に、光を失った黒い刀が、再び押しつけられる感触があった。下半身のコントロールがきかなくなり、パンツの中にあたたかさが広がる。

意識は失っていないが、涙と鼻水が止まらない。声を出そうとしたが、開きっぱなしの口からは唾液がたれるだけ。顔のそばには、

ななめに大きな亀裂が走ったノートPCがあった。タケオへのダメージを吸収してくれたらしい。バッテリーケース付近から煙が出ている。いったい明日からの仕事はどうしたらいいんだ？ 始末書で済むのか？ 哀しいことに、現実に対応できない頭が思考していたのはそれくらいだった。

第4話：朱く煌めくもの

混乱と痛みが、タケオの小さな世界を押しつぶそうとしていた。視界の隅では、でぶと金髪がにやにやと嗤いながら、タケオを見ている。ニットキャップとハゲ男が、ぐったりしたチイの頭と足を持つ。

……とにかく、息をさせてくれ。このままじゃ溺れちゃうよ……！どこか遠くでバイクの、かぁーん、という甲高い排気音が響きわたる。

……なぜこんなに人通りがないんだ。警察は？

「そう言えば名乗ってませんでしたねー、妹さんがいきなり飛び出すもんで」

赤メガネが再び、黒い刀先をタケオに向ける。

「私はニート狩り専門の独立浪士隊『サムライボーイズ』隊長、クジョーです」

何を言われているのかわからない。単語だけがばらばらに脳に伝わる。

……サムライ、ボーイズ？……なんてセンスのない……ニートって、あのニート？

タケオは刀から逃げようと、体を精一杯のけぞらせた。息がほんの少しだけ肺に入る。

「……チイは……学生だ。ニートとは……関係ないでしょ……」

言葉がもどってきた。丁寧語を使っている自分が情けない。光る唾液が地面に糸をひく。

「おや、ご存知ない？ 妹さんはこの先にある『星くず学園』の生徒なんですよ。いい歳した大人が学生服着て、税金をつかって学

校ごっこをやってる施設に在籍してるんですよ」

クジョーと名乗った男が、幼子に言い含めるようにゆっくりと話し始める。

「私たちは、この国を食いつぶすニートや、ひきこもり連中をちょっとでも減らすためのボランティアみたいなもんです。おにーさんは一応、働いてそうだから、見逃してあげようと思ったんですがねー、星くずの生徒の家族ってことじゃ同罪ということでもしかたない、でしょ？」

意識を取りもどしたチイが暴れだしたらしく、階下の男たちの動きがさわがしくなった。タケオの心臓が破裂しそうになる。

「あの娘に会うのは二度目かなー。前は右手ですんだんですが、今回はどーでしょうね？ まだ文化祭やめるつもりはないよーなので、ちょっと見せしめになってもらいますかね。おっとそれ以上動かなーい。今度こそ、一発で意識を飛ばしてあげますからね」

……現実こんな馬鹿がいるのが信じられなかった。なにがサムライだ！ こんなヤツらにいいようにこづきまわされて。目の前で妹をさらわれて……！

言いたいことがたくさんあるのに、言葉が出てこない。タケオは震える手で、冷たい歩道橋の手すりを握った。

ふいにすぐそばで、爆音が聞こえた。バイクのエンジンを空ぶかしするあの音だ。

クジョーは刀を向けたまま、歩道橋の階段から道路をのぞいた。階下の男たちも、全員音のする方に顔を向けている。

（警察……？）

へたりこんだタケオの位置からは声の主の姿が見えなかった。歩道橋の側面に設置された半透明の壁材が目隠しをしている。手すり

をつかんだ両手に力をこめて、両足をふんばろうとした。いつでも助けの声をあげられるように、深く息を吸いこむ。

ガチャリ、と金属が固いものにぶつかる音がした。バイクのスタンドかもしれない。規則的になったドドドド、というエンジン音をバックに、怒りをこめた低い声が響きわたる。

「おい！ 外道ども！ ……ウチの学生に何やってんだ？」

警察じゃないのか？ しかも女の声……！ 救いを求める気持ち
が急激になえていく。

だが、タケオの絶望と反するように、サムライボーイズたちの顔つきと動きは一変していた。さっきまでの「遊び」のような高揚感
はまったく感じられなくなっている。

クジョーが黙ったまま、二またに別れた反対側の階段へ走り出す。
タケオを振り返りもしなかった。

階下では、でぶと金髪が背中から黒い刀を引き抜くのが見えた。
ぱりぱり、という音とともに、刀身が青い閃光を放つ。ふたりは重
心を落とすと、じりじりと声の主の方へ接近していく。

気合いをこめた叫び声と同時に、ふたりが同時に遮蔽板の向こう
へと、飛びこんでいった。

でぶが体重をのせた一撃をフルスイングする。
金髪が刀を腰だめにして突っ込む。

息をのむタケオの耳に、高速で飛来するハチの羽音のような風切
り音が届いた。

交錯する閃光と悲鳴。遮蔽板の向こうで、青い光と赤い光がフラ
ッシュのように光る。

一瞬間を置いて、ぐえっという押しつぶされたような悲鳴があが
った。

突っ込んでいったはずのふたりが、逆再生したように、もといた場所へと吹き飛ばされるのが見えた。ワゴン車のエンジン音が重なり、いつの間にか運転席に乗り込んだニットキャップの男が怒声をあげた。

「相手がわるい！ 全員車に戻れ！」

その声もむなしく、赤い光の主はサムライボーイズを的確に急襲していた。

赤い燐光と短い羽音がする度に、立ち上がろうとするでぶと金髪の体が苦痛のステップを踊る。まったく反撃のスキを与えない。

突然、バッシュッ！ という乾いた炸裂音がした。混乱した戦場が一気に動きをとめる。

……まさか銃声？ タケオの足から再び力が抜けていった。夜空にクジョーの、のんびりした声が響く。

「はい、形勢逆転といきましょうか。武器をすてなさい。この女の頭に電パチをぶちこむ前に」

チィの悲鳴とも泣き声ともつかない、ちいさな呼吸音がタケオの耳に届いた。

第5話：下を向くもの

タケオの目の前に広がっているのは、一触即発の火薬庫だった。充滿しているのは、緊張と駆引きという名のガスだ。

ニットキャップの男が地面に転がるでぶと金髪を、悪戦苦闘しながらワゴンの中にひきずりこんでいる。運転席の中には、いつでも発車できるように、緊張した顔でハンドルを握っているハゲ男。中央には、ワゴン車を背中にして、チィを盾にしたクジョーの姿があった。

その視線は、わずか5mもはなれていない1本の街路樹に向かって、まっすぐに注がれている。

クジョーの右手にはおもちゃのような、黄色い銃が握られていた。銃口とチィのこめかみの距離は5m。かたく目をつぶったチィの呼吸がどんどん早くなる。

「聞こえませんでしたかねー。シュカ。試しに一発撃ってみますか？」

クジョーが街路樹に向かって言葉を投げた。黄色い銃口がとチィの頭の隙間がなくなる。

タケオは、汗ばんだ右手で手すりを握りなおすと、無意識に後ずさりを始めていた。一刻も早くこの場から逃れたい。足だけでなく、くいしばった歯までもが、臆病者のダンスをはじめめる。

人影がゆつくりと、街路樹の後ろからあらわれた。……シュカと呼ばれた人間なのだろうか。立っている場所は暗く、顔の判別もつかないが、タケオの視線は釘付けになっていた。

サムライボーズと交戦していたのは、華奢なシルエットを持つ、たったひとりの若い女にしか見えなかった。チィと同じ制服らしい

シャツの上から、不釣り合いな丈の長い上着をひっかけている。

「はい、そのままー、ぶっそうな右手の武器は地面において、手を頭の上で組め」

クジョーの言葉に、彼女はのろのろと腰を落としたが、視線だけは外そうとしない。

「早くしろー」

のんびりした声のクジョーが、ローファーをはいたチイの足先へ向けてトリガーを弾いた。

「きゃあっ!!」

路面を照らす電撃。チイの全身が大きくけいれんする。

タケオは、階段に額をすりつけていた。視界はすべて自分の影。なにも見えないことに安堵する。心の中が、この場から逃げ出すための口実で埋めつくされていく。

……今自分が飛び出していても、やられ役が一人増えるだけだ。
……見つからずに歩道橋の向こうまで渡ることができれば携帯で警察に通報できる。

……そうだ、見捨てるんじゃない、助けるために行くんだ。ごめん。わかるだろ。

頭を下げて四つんばいになった体が、一段、また一段と階段を昇っていく。誰かが捨てたガムが手のひらを汚す。汗ばんだスーツのひざがコンクリートを磨く。タケオは闇の中で一生を過ごす、目の見えない蟲になった気がした。おまえは最低だ、この卑怯者、妹殺し、耳元であざ笑う声が聞こえる。この世界のどこかにいる、もうひとりのタケオの声だった。

「あたしが武器を置いたら、チイをはなせ」

彼女が口を開いた。まぎれもない怒りが、戦場の空気をふるわせる。

「取引は不可能です。大丈夫。あなたも人間じゃいられなくなるまで通電してあげますよ」

クジヨーが笑いを含んだ声で応戦する。

「シユカ……武器をすてちゃ、だめだよ。だめ……」

撃たれているのに、まだ気丈に振る舞うチィのかぼそい泣き声が聞こえた。

タケオの両目から流れだした液体が、階段をつかむ両手をぬらしでいく。だが体は逃げることをやめない。永遠とも言える数秒、必死で手足を動かし続けた。後ろを振り返ると、すぐそこに歩道橋の最上段が見える。

……あそこまで行ければ。みんなが助かるんだ。きつと。きつと……！

止めていた息を吐き出そうとした時、能天気な電子音が戦場に鳴り響いた。その場にいますべての人間の視線が、歩道橋の上にうずくまるタケオにそそがれる。日曜朝からやっている女兒向けのアニメの主題歌。それも去年のやつ。すなわち、タケオの携帯電話の着信メロディだった。

「このガキ！」

ニットキャップが、歩道橋へと走りだすのと、タケオが呆然とした顔で、胸ポケットから携帯抜き出すのは同時だった。表示には会社、の二文字。ひざから力が抜けて、目の前が真っ暗になる。一段抜かして階段をかけあがるニットキャップの影が迫る。タケオは、誰かに救いを求めるようにまわりを見回した。涙で街灯が二重になって見える。

「んあああああああああああああ……！！！！！！！！」

タケオは目をつぶって、手の中の震える『最後の希望』を戦場へ

と投げ捨てた。

3年はみっちり使いこまれ、最近ではバッテリーの劣化から、タケオの呪いを一身に受け続けているあわれな携帯端末は、最後に奇跡を起こした。

強烈なスピンをしながら夜空を駆け抜けると、ニットキャップの頭上をかすめて、運転席に座るハゲ男のこめかみを直撃した。パニックになったハゲ男が、踏み込んでいたブレーキを一瞬はなしたのか、つんのめるように飛び出すワゴン車。背をあずけていたクジョーの銃口がチイの頭から離れるのが見えた——その一瞬、彼女は、力を取りもどした。

人間ばなれした速度で、地面に置きかけたテニスボールくらいの『武器』を握りこむ。地面すれすれのアンダースロー気味のフォームで、クジョーめがけて右手を振り抜いた。

超音速でかけ抜ける緋色の燐光が、一直線にクジョーの右手を砕いた。黄色い銃が路上にはじけ飛ぶ。

崩れ落ちるチイ。再び手を伸ばそうとしたクジョーとチイの空間を、赤い光がガードするかのごとく駆けめぐる。我にかえった運転席のハゲ男が、ドアを閉めながら、撤収だ！とわめいた。

劣勢を察知したクジョーが、ワゴン車の中へと身をひるがえす。タケオの前で、棒立ちになったニットキャップは、まだ状況を理解できないまま階下を二度見する。

「逃がさない、よ！」

そう叫んだ彼女の手が、胸の前で複雑に組み合わされる。ワゴン車を襲っていた赤い光が、軌道急激に軌道を変えて、ニットキャップに向かって疾走りだす。

「ぐげっ」

空気中の何かが焦げる匂い。ちりちりと発光する、糸のような火花。目の前のニットキャップの体がエビ反りになって、階段を2回、

3回とバウンドしながら落ちていく音。ワゴン車の中から手を伸ばした金髪が、痛みのにたうつニットキャップの体をひきずりこむ。

「チィ！車から離れろ！」

彼女が飛びこんでチィの身体をさらうのは、ワゴン車がタイヤを鳴らして半回転するのと、ほぼ同時だった。さっきまでチィがいた空間を、車の後部バンパーが消し去る。

ワゴン車が植込みを踏みつぶしながら車道へ出る。真っ黒なボディにタケオ達の姿が映る。ようやく意識を取り戻したでぶが、後部座席の窓から顔をのぞかせた。まわらない舌をけんめいに使いながら、彼女に人さし指を向ける。

「オデたち、サムライボーイズは、ぜったいにおまえをコロす……！」

彼女は小さく息をすいこむと、よく整備された機関銃のように反撃した。

「星くずに用があるなら、あたしんとこに直接来い。いつでも相手してやっからよ。てめーらみたいな、弱いもんいじめの○○○○野郎に、サムライなんて名乗られちゃ、この世は終わりなんだよ。帰ってお殿様に伝えな。お前らと遊んではっかいると頭が悪くなるから、いますぐ切腹してくれってよ。分かったかこの豚肉！」

でぶの顔が怒りで青ざめた。後部座席のクジヨーが何か声をかけると、ハンドルを握ったハゲ男が、ねっとりとした視線を残しながらアクセルを踏みこんだ。その眼には、棒立ちになるタケオの顔も映っているのはまちがいない。

5人を乗せたワゴンは、赤いテールランプの残像を残して消えていった。

第6話：名を名乗るもの

「立てるか？ ケガは？」

「うん……ちょっと気持ちわるい……ごめん、ごめんなさい、あたし……」

彼女の問いかけに、チイの語尾がふるえる。

「まったく、戒厳令が出てるのに、世話やかせんじやないよ、その男！」

彼女が急に振り向いた。力のこもった声に、タケオの身体がびくりとした。

「おにーちゃん！」

「チイの、兄貴ィ？……まったくどーなってんだ、今夜は。ねえ！ あんた、自分の足で歩けるかい？」

タケオはがくがくとうなずいた。力の抜けた両足をゆっくりと動かして、歩道橋の階段を一段ずつ降りる。ちよっぴりとはいえ濡れたズボンが冷えて気持ちわるい。小さな声で、チイがタケオのことを説明しているのが聞こえた。ふたりは、自分が逃げようとしていたことに気づいているのだろうか。会わせる顔がない、とはこの事だ。タケオは、自分のつま先だけを見て、最後の一段を降りた。

「おにーちゃん！！」

突然、チイの身体がぶつかって来て、タケオはしりもちをついた。

「おにーちゃんも、ごめん、ごめんね」

目の前でひざをついたチイが、泣きじゃくっている。

「……ああ。無事だったか……」

見れば、ワイシャツは、汗と泥に汚れ、スカートにはかき裂きができている。ふいに、鼻の奥がつんとした。妹はこの華奢な身体で、

最後まで抵抗しようとしていたのだ。それにひきかえ……自分は……。

チィの後ろから、地面をたく固いソールの音が近づいてくる。タケオは、とまどいながら彼女の足先に視線を向けた。

……なんなんだ……この娘は……？

タケオの視界に入ってきたのは、制服には合わない黒くてゴツい編みあげブーツと、やわらかそうな筋肉のついた足をおおう、黒のニーソックスだった。

目をすこし上げると、絶対領域の上の空間を占める、学校指定らしいグレーのミニスカートがあった。短めの夏用スクールシャツの首もとには、ゆるく結んだタイが揺れている。基本的にはチィと一緒の制服のようだ。

しかし、そのすべての印象をはね飛ばすのは、全身をおおう丈の長い学ランの存在だった。

いわゆる男子用のつめ襟。しかも変形学生服。すなわち「長ラン」と呼ばれるひざ丈の上着だった。街灯の光を受けて金ボタンが懐かしい輝きをはなつ。タケオの頭は混乱した。

……なぜに、学ラン？……コスプレなのか？

ふっと、いい香りがした。

「ケータイを投げてくれたのはあんたか。ちょっと診せてみな」
彼女は無造作にしゃがみこむと、タケオの手首に触れた。頭同士がすぐ近くまで接近していた。あわてて視線をそらすと、スカートから伸びるふとももの方に目がいきそうになる。

……なんでもいいけど近いよ！

タケオは、必死に自分の息がかからないように横を向きながら、こっそりと彼女を観察した。

形の良い小さな頭。女の子にしては短過ぎる赤みの強い髪の毛を、両サイドはピンで止めて後ろに流し、前髪と頭頂部の毛は南国の鳥のようにあっちこちに突っ立てている。大きな耳には軟骨までずらりと並んだリングピアス。夏服の上から羽織っている長ランは、よく見ると華奢な身体に合わせるように、腕や腰がしばってあるようだった。と手首にひきつれたような痛みが走った。

「あ、あいてででででてい！」

「一度の電撃傷だね。15万ボルトをくらったわりには軽症だ」

彼女は、タケオの悲鳴をもものともせず、手首をぐりぐりと動かしながら観察している。

「ラッキーだったよ。こんな状況で言っても説得力ないけど」

攻撃性をむき出しにしたさつきとは違う、深みのあるちよっとハスキー気味の声とともに、彼女が顔を上げた。手首を放され、ほっとしたタケオと、初めて視線が交差した。

……うそだろ！おい！

タケオの心臓が、くぐもった破壊音を立てて爆発した。

タケオはいわゆる美少女センサー内蔵型人間だった。しかもどちらかと言えば清楚な二次元の美少女が専門だ。制服に対するこだわりもあった。そのセンサーが警告を発する。どう見ても普通の女子学生には見えない髪型に、この時代にありえない学ランのセンス。特にピアスはゆるせん！

しかし目の前の存在は、ごくごく控えめに表現して……息をするのを忘れるほど、ずっと見ていたい。忘れないでいたい、記憶に刻みこめるならと神様に願うほどの……个性的な美少女だった。

とがったあごと、気のきいた皮肉がこぼれそうな唇。口を開くと常人より犬歯が発達しているのがわかる。小さく形のよい鼻。左右でややカーブのちがう眉。眉間によせたかすかなシワまでが完璧な配置だった。その眉の下には、見るものすべて吸いこむような、大

きなとび色の瞳があった。

瞳の中心には、誰にも媚びることのない強さと、肉眼では見えな
いプラスの力が煌々と輝く大きな光彩があった。刃のように研ぎす
まされた純粹さと、白く燃える情熱が一瞬ごとに輝いては、回転し
ていく。

しかしふと目を伏せた瞬間、その瞳の中に何かがよぎる。光彩に
は暗い紫の闇がまざり、うつりこんだ常夜灯の光が、星くずのよう
にまたたくのが見える。痛みなのか、哀しみなのか。それとも誰も
救えないほどの孤独？まるで相反する二つの要素が、同じ瞳の中に
同居する。愛と血。慈愛と暴力。陽光と月光。灰とダイヤモンド。
真夏の陽炎と真冬の低い空。永遠と一瞬。

タケオは息を止めたまま、彼女の瞳の中を旅していた。いったい
どんな人生を生きてくればこんな目の色に、光になるんだろう。

タケオは、彼女の二の腕に赤い腕章が巻かれているのに気づいた。
楷書の文字で「星くず学園応援団」と書かれている。

「ほしくずがくえん、おうえんだん……？」

思わず口に出して読んでしまったタケオの言葉に反応して、彼女は、
首をまわして腕章を見た。

「チィから聞いてないのか？」

とあきれたように独り言をつぶやくと、タケオの目をまっすぐに
見つめていった。

「あたしは、星くず学園、応援団団長・雨宮シュカ、よろしく」

アメミヤシュカ、応援団ってあの応援をする？ 団？

とつちらかった頭を抱えたまま、タケオもたどどしく自己紹介
をする。

「ボクは……チィの兄のタケオです。危ないところを助けてくれて
……その、ありがとう」

シュカの両手が伸びて、タケオの手をやさしく包み込んだ。……

あたたかい。

「ケータイ投げて、チャンスを作ってくれたんだろ。助かったよ」
再び、タケオの身体に恥辱と後悔の嵐がまきおこった。違います。
逃げようとしたんです。本当の言葉がのどの奥につまる。タケオは
何も言えず、暗い地面へ目を落とした。

こもったケータイのバイブ音が響いた。

シュカはするりと手をはなすと、夜空を背景にして立ちあがった。
チーターや、ピューマや、何か猫科のしなやかさと自由さを感じさ
せる長い手足。長ラン特有の、高さのあるエリについた校章がチリ
っと光る。シュカはみけんにシワをよせてケータイを閉じると、タ
ケオに目をやった。

「……ちよつと事情があつてね、いま警察には行つてほしくないん
だ。すこし時間あるならあたしらの学校へ寄つてほしい。ダメ
なら駅まで送るよ」

といった。チイを見ると、大きくうなずいている。タケオの頭
中で警告ランプが点滅する。やめとけ……警察届けるなというなら
……家に帰って寝ちゃえばいい。暴力にも、刀にも銃にも縁のない
世界に帰還するんだ。だが、その一方でさっきの罪をつぐないたい
自分もいた。そして、なによりもあと少しだけでも、シュカと言葉
をかわしていたかった。

答えないタケオを不思議そうに見つめると、シュカは戦場とな
った歩道橋下を歩き回りはじめた。クジョーが残っていた黄色い
銃や、葉莢のようなものを見つけると、長ランのポケットに落とす
こむ。

数mはなれた路肩には、シュカが乗ってきたと思われる赤いバイ
クがあった。銀色の文字でKATANAと描いてある。街路樹の脇
で主人の帰りを待つ、忠実な番犬みたいだった。

「やっぱり来てくれないの？」

タケオの隣にチイが立った。涙でマスカラが溶けて無惨な顔になっている。タケオは無言でハンカチを取り出した。

チイは無事な左手でごしごしと顔をふくと、鼻までかんだ。化粧を落として赤い鼻をしたチイは、タケオが昔から知っている、ゲームや親の愛情を取り合った二つ下の妹だった。

目の前にハンカチがつきだされる。

「洗って返せ」

タケオはその手を押しかえして、静かすぎる夜の街に目をやった。歩道橋をわたったこちら側は、なぜだかひどく闇が濃い。

「……なあ。お前なんに巻き込まれてんだ。サムライなんとか、拉致とかさ」

「話を聞く気……ある？」

涙のあとを残すチイの瞳が底光りした。タケオは答えにつまった。まだ心がきまらない自分が情けなかった。

ふいにヘッドライトが、歩道橋の下を照らした。どるどるどる、という低いエンジン音がすぐ近くで止まる。

……まさか、あいつらが戻ってきたんじゃない……

タケオの心臓がはねあがり、右手のヤケド跡が熱くなった。

第7話：道を選ぶもの

身をすくめたタケオの目の前にすべりこんで来たのは、これまた古そうなアメリカンスタイルのバイクだった。銀色にきらめくスポークホイールがゆっくりと回転を止めて、接地するスタンドが、じやきんとアスファルトを鳴らす。

タケオの目の前で、バイクの主がヘルメットを取った。

長いストレートの髪が胸まで落ちる。切れ長の瞳と、スレンダーなモデル体型の美人さんが、すこし困ったような表情であたりを見まわす。なんなんだ…今日という日は。タケオは美少女センサーの針が再び大きく動きはじめるのを感じた。…：ただし、こちらも学ラン着用…。どうみてもシュカの仲間っぽい雰囲気だった。彼女がほっとした表情で口を開く。

「チィ、だいじょうぶだった？」

「リンさぁくん」

ぼーっと立ちすくむタケオの後ろからチィが走りよる。

「戒厳令が出てるのに、ひとりで抜け出すだなんて」

「ごめんなさい。学校のすぐそばだから、だいじょうぶだと思ったの……」

ここではタケオは部外者だった。またむくむくと帰りたい気持ちが大きくなる。

「あいつらが帰ってくるかもしれない。早めにずらかるよ」

遺留品探しを終えたシュカが戻ってきた。リンさんと呼ばれた女性に、ポケットの中の銃と薬莢を見せる。

「これは…：スタンマグナム銃？」

「ああ、あいつら、スタンブレードだけじゃなくて、こんなもんも持ってやがった」

「ワイヤー連結型じゃなくて、大口徑の弾そのものに電気を帯びさせてから、撃ちだすタイプね。はじめて見るわ」

「帰ってオタケンに解析してもらおう」

シユカは低い声でつぶやくと、タケオに赤いヘルメットを投げてよこした。手の中にずしりと硬い重みが生まれた。

「チィはリンの後ろに乗れ。アニキの方はあたしのケツだ」

タケオは路肩で待つシユカのバイクを見て、もじもじした。

「どうする？ まだ決められないのか？」

シユカの声にいらだちが混じる。……きつと短気なB型だ。おっかない。

「……えーと、実は仕事がすね……」

誘いを断る時のいつも癖だ。タケオの右手が内ポケットのケータイを探る。が、ない！ さっきの光景がフラッシュバックする。運転席のハゲ頭にジャストミートしたケータイはそのまま……

「あああ！ あのだ！ ケータイを、見ませんでしたか！」

シユカが今気づいたのか、という哀れみを浮かべた目で見返す。

「だって、さっき奴らの車の運転席に投げ込んだろ？」

タケオの頭の中がまっしろになる。仕事の連絡が！……というか自分の個人情報、サムライボイズが持っているということに、なる、のか……？

悪夢だ、これは悪夢に違いない。タケオはごしごしと顔を手のひらでこすった。脂汗が伸びただけだった。

「あいつらに住所も職場も握られてるって訳か。今晩は帰れないな」シユカがだめ押しの現実を突きつけたが、完全に機能を破壊されたタケオはもう聞いていなかった。無彩色の視界の上に、ただただ絶望の言葉がスクロールする。もう終わった。短い人生だった。いいことなんてなかった。よし。死のう。

ふいに臀部にものすごい打撃を受けた。タケオは悲鳴をあげて路上に転がった。

「ケータイなくしたくらいで、死ぬとか言ってんじゃねーよ！」

どうやらタケオの口から思考がもれていたらしい。

「シュカ！やめなさい！」

あわてた声で長髪の女性が割って入る。

「てめーのケータイぐらいあたしらに取り返したるわ！いいから乗れ！」

真っ赤に燃える二対の目が、タケオを突きさした。

タケオの頭がしびれる。このまま帰宅しても地獄。進んでも地獄

……だが、女の子に殺される方がまだ、ましな気がした。

「……はい。パソコンを取ってきてもいいですか？」

シュカはうなずくと、またがったバイクに火を入れた。

タケオは歩道橋の階段の中ほどに転がっているノートパソコン入りのカバンを拾った。起動してみればわからないが、かなりの確立でオシヤカだろう。電撃のなごりらしい焼き切れた穴をさすってみる。

階下でシュカのマシンが吠えた。細い指がリアシートを差して、

乗れというサインをおくる。階段を駆けおりたタケオは、おそろおそろシートにまたがった。シュカの右手の回転とともに、甲高い排気音が生まれる。鼻先に届く白煙のあまい香り。カチリとクラッチをはなす感覚とともに、すごい勢いでバイクが路上に飛びだした。

「うわっわわわわ」

「下手だな、しっかりつかまってる」

シュカの手が後ろに伸びて、タケオの手をつかんで自分の腰にまわす。

（腰、細い……）

チイを乗せたバイクが後ろに続く。二台のバイクは闇の中をすべるように進んでいった。

第8話：中へ誘うもの

(温かい……ずっとこうしていられたらいいのに……)

いつしかタケオはシュカの背中にぴったりと寄り添っていた。

子猫と添い寝をしているような、それでいて守られているような安心感が全身を満たしていく。

と、バイクが急に停まった。三分も走っていない。シュカがイグニッションキーをオフにするなり、ぶっきらぼうな声を出した。

「はい、降りて」

後ろからチィを乗せたバイクのライトが近づく。タケオはがっかりした気分を隠して、もたもたとタンデムシートから降りた。振り返ると、周囲の雑居ビルの隙間に、さっきの歩道橋が見えた。わざわざバイクで来るほどの距離でないと場所を見ると、シュカはバイクで学校に戻ってくるところだったのかもしれない。

ヘルメットをシュカに手渡すと、ようやく到着地の「学校」を見た。

(これが……学校。こんな都会にあんのか……)

タケオの目の前にそびえたつのは、とてつもなく古い校舎だった。外壁の半分が緑のツタにからめとられ、一見ただけでは廃校に見える。

いまやさびれた観光地となり果てた秋葉原の一角に、こんな校舎があったとは。あたりを見渡すと、タケオの倍は年を重ねた妙に味の出ている個人所有のビルと、新しい外観の事務所や飲食店がつまった雑居ビルばかりが立ち並ぶ。夜間はおそろしく人通りがないようだ。

校門の前には、夏服を着た男たちが立っていた。いかめしい表情は、朝の校門の前にたつ体育教師を思わせる。両手に持った角材と、

ベニヤで作った盾が妙にもものしい。男のひとりが、ほっとした表情でシュカとチィの顔を見る。

「チィは無事だったんですか……みんな心配しましたよ」

「ごころーさん。戒厳令は継続。連れはチィの家族だ。客人扱いしてくれ」

明らかに三十代の男が、シュカに敬語を使っている。おどおどと門番に会釈するタケオの目に飛び込んできたのは、門柱に掲げられた金属のプレート。楷書で「私設星くず学園」という文字が刻まれている。

門番が合図をすると、重い駆動音をたてて鉄のゲートが開き始めた。

するり、と隙間をぬって校内に足を踏み入れたシュカが、ふりむかずに行った。

「もしさ、あんたが今の知識と経験を持ったままで、学校生活を、青春をやり直せるなら、どう生きる？」

突然の質問だった。タケオの頭の中に、さまざまな過去の自分が去来する。中学生時代の美術クラブ。校舎裏の駄菓子屋。いじめられて来なくなったクラスメイト。好きだった三組のミムラさん。上手く言葉がでないタケオを、シュカがちらりと見た。

「ここはそんな場所さ。ようこそ。星くず学園へ」

一歩校門をくぐると、発電機をまわす独特な騒音が聞こえた。

にわかづくりの角材電柱につるされた工事用のライトが、深夜の中庭を照らしている。

地上から4mぐらいのアーチには、「文化祭まであと2日!」と書かれた模造紙が貼られている。明るい中庭には、ジャージ姿や夏服姿の男女が、忙しそうに動きまわっていた。その数は百人近い。

ブルーシートの上に積み上げられた、テントの鉄骨や、木製のパネルの間をぬうように、シュカはバイクを押していく。シュカに気づいた生徒が、つぎつぎに駆け寄ってきては、チィの無事を喜んで

いる。中年のおばさんがチィを涙ながらに抱きしめているのを見て、タケオは横を向いた。

中庭を取りまくようにして、四階建ての校舎が立っている。外から見たほどではないが、こちらかなり老朽化しているようだ。白っちゃけたコンクリの壁面には、ヒビや補修の後が目立っている。校舎の一番上についた時計の針は、深夜十二時前を示していた。

明らかに、現在進行形で学校教育がおこなわれている施設とは考えにくい雰囲気だが、目の前では、生徒としか形容できない人たちが、文化祭の準備にあけくれていた。

タケオは混乱した頭で、周りの人間を観察した。

タオルを頭に巻いたひげ面の男が、トンカチをふるって模擬店の壁らしきものを作っていた。くわえ煙草で缶ビールをかたわらに置いている。となりでペンキを塗っているのは、同じジャージ姿の眼鏡に一つ結びのオタク風味の女性。角材やら丸めた模造紙の束を運んでいる人にいたっては、耳の上には髪が残っていないオッサンだ。それも、タケオの会社の部長くらいの年齢にみえる。ヤクルトのおばちゃんぽい妙齢の女性が、笑顔で若い人に何か指示をしている。どこかの窓からは、景気づけに流す古いアニソンが流れていた。軽トラックの荷台に人がむらがって、ビールケースを下ろしているのが見えた。

みなシュカに会々と、ほっとした表情で集まってくる。バイクを駐輪場に止めたシュカが、皮肉っぽい笑顔で、何か冗談を飛ばしたり、背中をどやしついたりしている。祭りの準備をする高揚感が、活気をもたってこの場所をつつんでいた。

税金を使って、学校ごっこをやってる施設……クジョーの言葉がタケオの脳裏に浮かんた。

「タケオ、朝までそこに立ってんのか？」

ぼーっと中庭を見つめているタケオの耳に、少しかすれたシュカの声が届いた。

「チィなら保健室。あんたはこっち」

タケオはあわててシュカの姿を探した。昇降口の奥へ、ひるがえった長ランのすそが消える。

……やった！ 名前を呼んでもらえた！

タケオは、さっきまでの羞恥心も疑念も脇に置くと、校内に足を踏み入れた。

第9話：名をつけるもの

昇降口には、木製（！）の下駄箱と、ペンキのはげた古い傘立てが並んでいた。

シュカが外来者用のスリッパをぽん、と投げる。

校舎の上から見ていたのか、階段を下りてきた生徒たちがかけ寄ってくる。これまた年齢も性別もまちまちだった。興奮と不安がまじりあった空気に押され、タケオはシュカのそばをはなれた。画鋲だらけの連絡掲示板に寄りかかる。

「シュカ！歩道橋にまでサムライボーイズが出たって本当なの？」

「あいつらが、文化祭当日になだれこんでくるって噂が流れてるんだ。どうしよう！」

「ノアが部室でむくれてたよ。また留守番だって」

「なんだか生徒会内でも意見が割れてるみたい……文化祭、中止になっちゃうのかな？」

「工作部のオタケンが、試作品を持ってシュカを探してるって」

一つだけ分かったことがある。この校舎の中で、シュカは大変に忙しい人物だ。

「……歩道橋の件は未遂で終わったよ。まだ帰宅連絡が取れていない連中を知ってる人はいいる？」

シュカはみんなを見回した。白い汚れのついたジャージの女性が心配そうにいう。

「バスケ部の一団が戻ってないの。俺達が逆に狩ってやるって興奮してた。連絡が取れなくて」

「あーの筋肉バカどもが……エミリーとハルカに警戒に向かわせる。みんなも不用意に外へ出ないでほしい。今バラバラになったら奴ら

の思うつぼだ。生徒会とは話しあってみるよ。だいじょうぶ。ぜったいに文化祭は邪魔させない……！」

ひとりひとりの目を見ながらシュカはゆっくりとしゃべった。シュカより年上に見える生徒たちが、その言葉をくいいるように聴いている。

「夕方の戒厳令はまだ継続中だ。外出は控えてくれ。自宅に帰る人達はかならずタクシーを使って集団で下校してほしい。秋葉原駅は狙われている可能性があるから、となりの駅まで行ってくれ。泊まる人は、体育館と各部室を男女に分けて用意するって運営が言っていた。手の空いてる人は、一度体育館で待機。あたしはこれから生徒会と今後について話し合う。部室には団員を置いておくから、小さなことでも、不安なことがあったらいつでも知らせに来てくれ。」

一息に指示を出したシュカの目が底光りした。

「あたしたちを攻撃して、自分が立派になった気がしてるクソどもから、必ずみんなを守ってみせるよ。だからみんなもおちついて、大人だつてところを見せてくれ。特に年配の生徒は、若い生徒が不安になったり、跳ねあがったりしないようにサポートして欲しいんだ。いいね、できるよね」

みんなが頷く。さっきまでの張りつめた空気が和らぐのを感じた。みんなが持ち場に帰るまで、シュカは下駄箱の脇に立っていた。その横顔は、歩道橋で会った時よりずっと大人びて見えた。

「部室に案内するよ」

シュカが廊下のすみにたたずんでいるタケオに声をかけた。

中庭をぐるり囲む形の廊下を歩く。

元職員室らしい長い部屋を過ぎると、廊下のどんづまりに「部室」があった。

年期の入った開き戸に似つかわしくないセキリュティの高そうな錠前。タケオが働く会社のサーバ室にある、指紋認証キーロックを

より高性能そうだ。ドアの右側には墨痕あざやかな筆文字で書かれた「星くず学園應援團」の木の看板がある。

シュカが人差し指をキーロックにかざすと、プシューっと音がしてスライドドアがなめらかに開いた。ドアの断面を見ると鉄板が入っている。

「ノアはいないじゃねーか……ちょっと待ってな」

細いあごで灯りの消えた部屋の中を指すと、そのままシュカはＵターンして出て行ってしまった。

（こんな所でひとりぼっちにされても……）

タケオは小さくなるシュカの背中を、心もとない気持ちで見つめた。

しかたなく部屋に足を踏み入れると、自動感知で反応した蛍光灯が部屋内を照らした。タケオの目の前に浮かびあがったのは、部屋と言うより何らかの指令室のようだ。

（すげーな……おい）

教室机が３台ずつ向かい合わせにされ、それぞれの机には３面に配置された液晶ディスプレイ。無造作に置かれたヘッドセットマイク。黒板があるべき場所には、黒板サイズのタッチ式フラットディスプレイが埋め込まれている。

窓と反対側の壁には、これまた巨大な『団旗』と言うのだろうか、黒に金の刺繍と縁取りがされた旗が掛かっていた。アナログとデジタルの融合。黒板式ディスプレイとは反対側には、がっしりとした大型のロッカーが５つ並んでいる。どれも表面に赤や黄色で整然としたペイントが施されていた。

「01・RED-SHUKA」と赤でペイントされたロッカーが、シュカのものらしい。そのロッカーだけ扉が半開きになって、中から細いコードのようなものが垂れている。

（不用心だな……）

扉を閉めようと、タケオが手を伸ばしたところで、部室のドアが開く音がきこえた。

ロッカーから飛びのいたはずみで、真後ろにあった椅子の背が、タケオの臀部に突き刺さる。痛みををこらえてドアの方を振り向くと、長い髪の女性がこちらを見つめていた。リンさん、とチィが呼んでいた人だ。

「あ、あのちがうんです。中を見る、とかじゃなくて、今もロッカーのですね」

我ながら絶望的に怪しいリアクションだ。

しかし目の前の女性は、にこやかに笑顔を浮かべると丁寧なおじぎをした。蛍光灯の光を反射したつややかな黒髪が重力に引かれてぱたたと落ちる。

「ごあいさつが遅れました。星くず学園応援団副団長・青海 凛で
あおみりん
す」

タケオもあわてて自己紹介をした。

「このたびは当校のトラブルに巻き込んでしまったようで、本当に申し訳ありませんでした。シュカはちよつと今手はなせないようでした、団長代行として参りました。まず、ウチの制服でよければ、お着替えなさってはいかがですか？　その後ケガの手当をさせていただきます」

今日初めてまともな人に会った気がした。と言いつつ、リンさん（思わずさんをつけたくなる）も女子用の夏用シャツとタイの上から、学ランを着用している。しかも残念なことに、指定のスカートではなく、細身の男性用制服ズボンを着ているのだ

……ああ、なんてもったいないんだ、とタケオは心の中で盛大になげいた。とは言え、その姿はリンさんに似合っている。男装の麗人という言葉が頭に浮かんだ。

涼しげな切れ長の一重まぶたの下の視線を外すように、リンさんが後ろを振り返った。

「ノア、救急箱はわたしが預かるから、お茶を用意してくれる？」

ふと見ると、リンさんの背後にもう一人同じ格好をした女子がいるようだ。

明るめの髪をツインテールにまとめて、真剣な目でタケオをガン見している。

せいっぱい団員風をよそおってはいるが、いかんせん手足が短く、はおった学ランはだぶついていた。

「押忍！自分は、星くず学園応援団団員、桃栗ノア（ももくりのあ）、と申します！」

足を肩幅まで開き、両手を背中の中で組んだ姿勢で、ノアと名乗る少女は、すっとんきょうな大声を張り上げた。鼻の穴が大きくなっている。

興奮したハムスターを連想させるその姿に、タケオは自分の頬がゆるんでいくのを感じた。いったい笑ったのはいつ以来なんだろう……？

第10話：胃をみたすもの

高校卒業後、四年ぶりの制服は不思議な着心地だった。

夏服のシャツから伸びた真っ白な二の腕が無防備に思えて、タケオは腕をさすった。

ノアが入れてくれた冷たいお茶の隣には、湯気をたてる大ぶりの饅頭の山。

白い皮の表面には、背筋をのばしたちいさな猫の焼き印がある。立ちのぼるあたたかな香りにつられるように、タケオの胃が目覚めの声をあげた。

「実家からの差し入れです。おいしいですよ」

リンさんの言葉に、恐縮しながら手を伸ばすと、一口ほおぼった。柔らかい皮の下から熱い肉汁があふれ出てくる。

はふはふと息をしながら、タケオは3つの饅頭をたいらげていた。身体が暖かくなり、こわばりが溶けていく。

ようやく落ちついたタケオは、ごちそうさまでした、と深々と頭を下げた。

ノアが残った饅頭にちらちらと視線を向けている。

すすめると、やったー、と叫んでかぶりついた。

リンさんが、あなた今日何個食べてるの、と呆れている。

「この学園にいらして、何か気づいたことはありませんか？」

リンさんは空いた皿を片付けながら、軽いトーンで話しかけた。

弛緩していたタケオは、その声にひきこまれるように、第一印象をまとめようとした。

「……ぱっと見、定時制の夜学かな、と思ったんですが、あまりに生徒さんの年齢がばらばらなのでびっくりしました。しかもこんな夜中に」

ちらりと部室の時計を見ると夜の十二時半だった。

土曜日のはじまり。仕事の状況を思い出すと、暗い気持ちがよみがえった。

あの戦闘でケースがひしゃげたノートPCは、学内で修理ができる人間にあたってみる、と言われノアに預けてある。

「長い話になります」

リンさんはそう言うと、タケオの空いているグラスを下げて、暖かいお茶を用意しはじめた。

これだけのマシンを管理するためにはずっと冷房をつけているのだろう。

リンさんはなめらかな手つきで、温めた湯呑みに黄金色の液体をそそいだ。室内に、やわらかいジャスミンの香りがたちのぼる。ノアにもお茶を配ると、静かに席についた。

「まず、この学園の成り立ちについて説明させてください。」

リンさんの声は大きくはないがよく通る。ノアは入り口に近い席に戻っていった。

「私たちが所属するこの学園は、正式名称を「私設星くず学園」と言いますが、学校法人でも、専門学校でもありません。この学校の入学資格は20歳以上???すなわち成人を対象にした???『青春体験サービス施設』です」

話し慣れているのか、リンさんの口からなめらかに言葉が継がれる。

タケオは、校門をくぐる時にシュカが放った問いかけを思い出おこした。

（あんたが今の知識と経験を持ったままで、学校生活を、青春をやり直せるなら、どう生きる?）

タケオはその言葉をくり返した。

「……青春の、やりなおし」

「はい。タケオさんは学生時代を楽しんで過ごされましたか？」

タケオは迷いもなく首を横にふった。

暗黒とも言えないが、曇り空のグレーが続く3年間。

特に高校一年次に、ケガと人間関係で、野球部を辞めてからは、どこにも居場所を見いだせなかった。今でも高校時代の友人とは会っていない。

リンさんはにっこりと笑った。切れ長の目だが、不思議と冷たい感じはしない。

「必ずしも学生生活は楽しいものとは限りません。思春期の真っ最中に、校則や受験に追われて、自分が何者かもわからずに過ごしている人もたくさんいます。もう二度と行きたくない、と思っている人もいるでしょう。ちなみに……タケオさんは学園もののアニメや本がお好きですか？」

好きだった。タケオはあわてて言葉をついだ。

「いや、でもフィクションとしてですよ。そんな……」

言いかけて気づいた。自分は青春の追体験を求めてたのか？

「この学園のコンセプトは、大人が青春を取り戻す？？上書きすると言ってもいいですね？？ための『学校ごっこ』の場の提供です。この学校には授業も、テストありません。あるのは『放課後と部活動』のみです。生徒は部活に所属しなければならぬという決まりはありますが、出る出ないは自由です。校舎は平日の午後6時から11時まで、土日は一日中解放されており、現在およそ300名の生徒が在籍しています。ちなみに今は特別期間なので、校舎への寝泊まりが許可されています」

タケオは話を聞きながら、妄想の翼を広げた。

もし、あの試合で怪我をしていなかったら。

もし、もっと自分から話しかけて、人間関係を構築できていたなら……そうなのだろうか？

「この学園ができたのは、およそ8年前です。当初は少子化によって廃校になった校舎を借りて、社会人向けのサークル活動の場を提供するカルチャースクールでした。しかし開校してみると、一般の社会人以外に、これまでちゃんと学校に行くことのできなかった人たちからの入学希望が多いことに気がつきました」

「いわゆる、不登校ということですか？」

制服姿のチィが目の前に浮かんだ。リンさんが頷く。

「はい、不登校への支援や議論が高まってきた時代だったので、この学園もニーズに答えるかたちで受け入れを始めるようになりました」

リンさんが湯呑みに両手をそえた。爪にパールがかった薄紫の花びらが散っている。

「現在では、働きながら部活を楽しみに来ている人と、不登校経験があり、リハビリのために通っている人の比率は五分五分です。はじめはどうなることかと思いましたが、学校ごっこという仮想世界の中で、びっくりするほどみんなの関係は良好です」

タケオは言葉を選んで質問した。

「良くなるんですか？ その……心の病とか、不登校とかが」

リンさんが真面目な顔で頷いた。

「もちろん私たちも医者ではないので、投薬や専門的なカウンセリングは学校外へ委託しています。ただ、対人関係への恐怖感の克服や、自己への肯定感の獲得については大きな効果を上げているようです。実際に卒業生の5割が、アルバイトについたり、なんらかのかたちで社会参加することができるようになりました。不登校経験者のネックとして、いきなり社会のスピードにあわせて参加することが難しいという点があげられるのですが、ここでは部活を通じて、

対人関係の練習ができるというのが大きいようです。また、最近の傾向では、うつ病と診断されて休職されるサラリーマンの方や、それを支える家族の方も増えています。」

タケオはさつき中庭で見た光景を思い返してみたが、みんな驚くほど元気そうに見えた。仕事に疲れた自分の方がよっぽど病んでいる。義務ではなく、楽しむためだけの学校生活。なんだかおとぎ話のようだ。

「……大人の楽園、てとこですかね」

タケオはぽつりと感想をもらした。

「じゃあ、シユカや、リンさんはこの学校の生徒なんですか……？ その、不登校を経験してる？」

リンさんが長い首をかたむける。

「わたしは14歳の時に、病気の父親の代わりに、青猫楼という中華街にあるお店を継ぎました。幼い弟妹の面倒も見なければならなかったのも、高校へは進学しませんでした。今では結婚した妹夫婦が店を継いでくれたので、世間を知ろうと旅をしているうちにこの学校のスタッフにスカウトされたんです」

中華街というのは横浜だろうか。バイクにまたがり、旅をしているリンさんを想像した。

「……シユカは、やっぱり中学生の時に色々あって学校生活はほとんど送っていないはずです。詳しいことはあの娘が話す気になったら教えてくれるでしょう」

ヘッドセットマイクをつけたノアの様子をうかがうと、ディスプレイ上にあらわれる様々な光点を一心不乱に追っかけている。新車のハムスター遊びかもしれない。

彼女にも色んな過去があるのだろうか。

第11話：目を開くもの

「この学園には、3つの運営組織があります。」

リンさんが細い指を立てる。華奢な手だが、指の内側には硬そうなタコがあるようだった。

「学園の経済を把握し、裏側から支える『経営会』と、生徒の投票によって校内のイベントや部活を仕切る『生徒会』、それから私たちが所属している『応援団』です」

タケオが頷く。

「この団体に所属するスタッフは、特待生として学費が免除されたり、その仕事の責任によって、学園側から報酬が支払われています。ただ、始めからそのスタッフが決まっているのは稀で、大部分は学生の中から適性がある人や、自発的に参加したいという人が、スタッフに参加していく仕組みになっています。もちろん義務として、ずっと学校の仕事をしなければならぬので、『青春』ではなく『仕事』になってしまいますが……ノアをはじめ、残り3人の団員は学生から採用されました」

経済と、政治と、司法といった所なのだろうか。

それでこのご時勢に、非営利とは言え300人も在籍する『学園』が運営できているのは、よっぽど優秀な人材が揃っているのかもしれない。

タケオは空になった湯呑みを置くと、ぼんやりとした目で、団旗を見つめた。

「しかし……応援団の仕事はなにをするんですか？　チアガールでも良さそうなのに」

リンさんは、手際良くタケオの湯呑みに新しいお茶を入れ直してくれた。

「応援団は、もちろん生徒を応援するためにあります。他の学校や、

社会人と部活の試合をしたりする時には私たちも駆けつけます。ですが実際の所は、なんでも屋というか……トラブルシューターというか、学園内の自治を護るための独立機関なんです」

リンさんの目に、ちよつと疲れた光が宿った。

制服のせいで若く見えるが、やはりその横顔は大人の女性ものだった。

「人間が集まるところには、必ずトラブルも集まります。軽いものではケンカ、窃盗、恋愛問題、重いものでは、いじめ、詐欺やストーカー、性犯罪もあります」

一瞬だけ、リンさんの表情が険しいものになった。

「この学園は、前科や入院歴によっては入学を見送ることもあります。が、わりと入学資格の敷居が低いので、学生のメンタルヘルスの問題を抜きにしても、トラブルは毎日山ほど起こりますよ。それをまあ、私たち応援団が、聞き取り調査をしたり、仲裁に入ったりしたりする訳ですよ。最終的に裁く権限はないんですけどね」

「……警察みたいなものですかね」

どちらかというときュカはその反対勢力に思えた。

「私たちは、楽園の庭師みたいなものと思っています。しんどいこともありますが、悪くない役目ですよ」

リンさんは声を立てずに笑った。

中庭で男女が盛り上がる声が聞こえた。誰かがペンキの缶を蹴とばしたようだ。

「あの……シュカさんは遅いですね……」

タケオは、上の空で出ていったシュカが気になっていた。

「きつと生徒会ともめているんでしょう。あの娘はどうしても文化祭を開催したいんです」

まるで歳のはなれた妹を思いやるような口ぶりだった。タケオが重ねてたずねる。

「文化祭はやるんですか？　こんな状況でも」
さつきシュカを取り囲んだ生徒たちの不安なまなざしが目に浮かんだ。

「文化祭というのは、この日曜日に一昼夜かけて行われる、学園最大のイベントです。父兄や会社の同僚、地元の方もお招きして、クラスや部活の出し物を発表します。生徒にとっても、私たちスタッフにとっても、「青春」を再体験できる最大の機会なのです。生徒会が行った投票により、文化祭の決行は大多数支持を得ています……が、その警備体制については、学内でも意見が割れているところですよ」

たかが遊びじゃないか、そう言えない雰囲気があった。中庭の人々にも、チィにも、目の前のリンさんにも覚悟と矜持があるようだった。

「この学園の生徒はほぼ全員が、もう一度青春を取り戻したいと願っています。先ほど言ったようなトラブルは多いですが、自分達の居場所を大切にして、再び社会に復帰する力にしたい、という気持ちだけは、本当に真剣なものです。今回チィや、タケオさんが巻き込まれた事件は、そんな願いに反発する力なのでしょう。自分たちがつらい目にあっているのに、どこかで笑っているやつがいるのは許せない。自分の絶望を分けてやりたい、そう思う人たちの悪意の露出ですよ」

湯呑みにまわされたリンさんの指に力が入り、関節が白く浮かび上がる。

この人も、シュカと同じように戦うのだろうか。自分の居場所のために、他人の祭りのために。
タケオは目を閉じた。

歩道橋の上で自分が妹に放った言葉を思い出す。……いい身分だな。自分の心の中に、サムライボーイズと同じ感情があることに気づいてしまった。いや、今でもその思いは消えない。そして、あの場で妹さえ捨てて逃げようとした自分がいた。他人と距離を置いて、仕事をする事でなんとか保っていた自分が、崩れ去る気がした。

話を聞く気がある？と訪ねたチィの顔が浮かんで、消えた。

「あいつらは、何者なんですか？」

タケオは目を開けて、たずねた。

第12話：黒く波うつもの

「一年前に関西で起こった、7-11と呼ばれる事件をご存知ですか？」

リンさんの言葉に頷いた。日本人で知らない人間はいないだろう。異常に暑かった去年の夏、大阪のネットカフェで二人組の若い男が硫化水素自殺を図った。

結果、その男達だけではなく、店員をふくむ7人が命を落とした事件は、大々的に報道された。

しかし、その後の捜査で、事件は信じられない展開をみせる。

彼らが根城にしていたネットカフェの私物から、幼い女の子を殺害する様子を撮影したムービーと、大量の写真が発見されるに至り、大阪県警は、二人を大阪・兵庫で相次いで起っていた連続通り魔事件の犯人と断定した。幼児・ホームレス・妊婦など、鈍器でめった打ちにされた被害者の数は11人。その被害者の数から、ネット上では、セブン・イレブンと呼ばれている事件だ。

「あの事件の犯人の一人は、不登校の経歴を持ち、メンタルケアスクールを転々としていました。……この学校にも短期間ながら、在籍していたことがあります」

むきだしの腕が栗立つ。一瞬、見えない何か、閉め切られた部屋の中を移動した気がした。

「きっと学校に来たのは、ほんと数回でしょう。スタッフの誰も、顔を覚えていませんでした。マスコミからも、たくさんの電話がかかってきました。でも、わたしたちにとっての事件はその後に起きました」

長いまつげを、かすかに震わせながら、リンさんは言葉を継いだ。
「事件の一週間後、犯人が最後に通っていたとされる兵庫県の間
タルケアスクールが、何者かによって襲撃されたのです」

最悪の事件を震源地とする津波。中庭の嬌声が遠くなり、ノアの
キーボードを叩く音だけが、重くなった空気の底に沈殿する。

「結果、死者こそ出ませんでした。が、スクール施設は放火に遭い、
巻き込まれたスタッフや学生の多くが居場所を失いました……現場
には、働かずに政府の支援を受けている『蟲』たちを狩る、こんな
支援施設があるから、7-11のような事件が起こるんだ、という
内容のメッセージが残されていたと言われています」

「蟲……」

たしかクジョーもその単語を使っていた。

「一連の事件を受けて一気に世の中の空気が走りだしました。働け
ないものを差別し、叩く方向へと。襲撃犯が捕まらなかったことも
あり、各地で『不労者狩り』とか『蟲狩り』と呼ばれる行動をおこ
す人達が現れました」

「……サムライボーイズもそんな連中の一派なんですね」

やっと追いついた思考を確かめるように、タケオは呟いた。

事件のあらましは知っていたが、世間の空気がそこまで強くなっ
ていることや、『蟲狩り』などという行為までが流行していること
は、まったくというほど知らなかった。リンさんの細い両手の指が
組み合わされる。

「彼らが、この街に現れたのは、およそ二ヶ月前」

五人の顔を頭に浮かべた。クジョー、でぶ、金髪の小僧、ハゲ男、
ニットキャップ。

特殊部隊のような黒い衣装と、「侍」の一字が描かれたドクロの
ロゴ。

「『スタンブレード』と呼ばれる電磁刀や『スタンマグナム』とい
う電磁銃で武装している男性5人の組織です。年齢は10代から4

0代までと幅広く、リーダー格は、赤い眼鏡をかけたクジョーという男。人気のない路地で学園の生徒を待ち伏せしては、暴力を加えて、金銭や持ち物を奪い、車や原付で逃走する手段をくり返しています」

スタンブレード……あの『刀』のことだ。タケオは斬られた瞬間の恐怖を思いかえして、シャツの胸のあたりをさすった。

「なんなんですか？ あの武器。ほんとに死ぬかと思いました」

リンさんは席を立つと、青い文字で『02・BLUE LINE』と書かれたロッカーから、濃紺の木刀のような武器を取り出した。サムライボーズの刀よりはるかに長い。タケオは、息をのんだ。

「この刀も、彼らの武器と同じ電磁刀、スタンブレードです。握りのスイッチを押すと、刃の部分に高圧電流が流れだします」

「その刀は、リンさんが使うんですか？」

刃先に視線を向けたリンさんが答える。

「そうですね……実戦で使ったことは一度もありませんが、サムライボーズがあそこまで武装化してしまうと、私たちも丸腰で警備をするわけにはいきません」

悲壮とも言える、覚悟を決めた声。止めるべきだ、と思ったが、結局タケオの口から出たのは、そうですよね、という情けない一言だった。

「チィは、妹は前にも被害に会ったことがあるって……」

「10日間でしょうか。文化祭のための資材を買いに行った帰りに、ひどく脅されたようです。一緒にいた美術部の男子学生は怪我をしました」

チィは、どうして歩道橋の上でそのことを告げなかったんだ。いや、そもそも聞いたのか？ そこまでして文化祭にこだわるのはなぜだ、どうしてこの学校に戻ってくるんだ。

リンさんが巻いてくれた包帯をいじりながら、タケオ暗い声で問いかけた。

「……なぜ警察に相談しないんですか？」

第13話：背中を押すもの

濃紺のスタンブレードを、ロッカーにしまい終えたリンさんが振りかえる。

「現在、国会の審議案の中に、『雇用再生法案』という法律があります。世論の後押しを受けて過去に否決された法案が息をふきかえたのですが、その法案が通れば、この学校への支援は打ち切られ、それこそ五体満足で就学・就労していない人を、合法的に国内外の大農場や工場へ強制連行できるようになります」

空いた口がふさがらない。中国の工場や、ブラジルの農場で働くチイの姿が頭をよぎる。本当にそんなことができるのか？

「この法案に対する議論はメディア上には出てきません。それどころかこの法案を通したいと願っている『偉い人』は、各地のメンタルスクールが問題を起すのを待っているという噂があります。先日、『蟲狩り』の被害にあった九州のスクールが、『安全確保のために』業務停止命令を受けました。その時は警察に相談した内容がマスコミにもれて大騒ぎになり、監督官庁からの命令が下されました」

「そんなのって……おかしいですよ」

思わず大きな声を出していた。冷えたジャスミン茶が波を立てる。国も警察も世論も、この学校をなくそうとしているというのか？そこまで追いつめられているのか？……タケオは、深刻な話題の連続にこわばった首筋をもんだ。

「さらにもうひとつ……シユカはあの通りの性格なので、これまでも生徒を守るために、周辺の暴力組織と大立ち回りを演じたこともありまして……地元警察にも目をつけられているんです」

リンさんは困ったような、少し恥ずかしそうな顔で、語尾を小さ

くした。

そりゃそうだ。彼女なら地元の不良どころか警察にでも、不適な笑みで突っかかっていきそうだ。そんな姿を思い浮かべていると、リンさんがすっと立ち上がり、深々と頭を下げた。

「本当にシュカと、うちの学園がご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

「いや、そんな、ボクこそなんの役にもたてなくて……その、今夜警察に行くのは、やめときます。……でも、応援団はこれからどう動くのですか？」

頭を上げたリンさんが、まっすぐにタケオの瞳を見た。

「ひょっとしたらもうこの学校のやり方は時代に合わなくなってしまうたのかもしれませんが。生徒の中にも、甘えるだけ甘えて、社会に参加することなく、また別のスクールに入学していく人もいます。でも、確かにいるんです。この学校を出て、再び社会に参加できる自信を取り戻した人たちが。わたしたちは、一種の『武器』として、この学園を守るために存在しています。わたしを含めて、たくさんの傷を負った生徒が、ほんの一時肩をよせあえる場所をつなぎとめるために、できることはなんでもしようと思っています」

リンさんの目の中に、宗教やボランテニアに悪はまりしているような、盲信の光はなかった。迷いと畏れ、それでも現実に立ちむかおうとする力だけがあった。タケオは思わず、なにかできることはありますか、と言いそうになった。……あわててもうひとりの自分が、引き止める。何を首をつっこもうとしているんだ。代わりに口から出た質問がひとつ。

「シュカさんは、なぜボクをつれてきたんでしょうか？」

言ってから、急激に顔が熱くなる。何を言っているんだ？　リンさんがふっと微笑んだ。

「さて……口封じだけじゃないのは確かです。シュカはああ見えて

人を見る目があるんですよ。きっとタケオさんの背中に、押せば飛べる翼を見つけたんじゃないかしら。」

「翼？」

これには驚いた。22年間生きていて、自分が飛べるなど思ったことなど一度もない。

「あと少しの勇気が持てない人の背中を、そっと押すのも、応援団の仕事のうちです。今までもシュカはたくさんさんの背中を押してきました。ときどき強く押し過ぎちゃうのが、心配なところですが」

リンさんの顔に笑顔が戻った。タケオも、つられるように頬をゆるめた。

「もし、この危機を乗り越えて、文化祭がぶじに開催されるようだったら、もう一度遊びにきてください。悪くないですよ、大人になってからの青春も」

頷こうとしたその時、部屋にあるすべてのディスプレイが赤く染まった。短い間隔で明滅をくりかえす画面には『EMERGENCY』の文字。緋色に頬を染めたノアが、ヘッドセットを外しながら叫んだ。

「警邏中の03エミリーから通電。御徒町方面高架下にて、外出中の生徒8名が、サムライボーズの襲撃により受傷！ 現在04ハルカが車両にて現場に急行中！」

第14話：獣を宿すもの

ノアを振り返ったリンさんの目が蒼く燃え立った。

「被害者の詳細」

「二回生バスケ部、コウノ、オイカワ、ツジ、スミタ、ツマハラ、ババ、リー、スタンレイ。ババは、右手首骨折の重傷です」

背後で、プシュツと空気が圧縮される音が聞こえた。

開きかけたドアに身体をぶつけるようにして、駆けこんできたのはシュカだった。目の縁が真っ赤になっているのは、怒りか、哀しみなのか。

シュカは、部室内の3人には目もくれず、さっきタケオが触れようとしたロッカーにたどりつくと、赤い扉を引きちぎるように開いた。

「シュカ！なにがあったの」

リンさんが、音もなくシュカのかたわらに立った。

「やられたのは、酔っぱらってサムライボーイズを見つけてやるって息まいてた連中だ。素人がはねあがりやがって……！右手をつぶされたなんて、バスケができなくなったらどうするんだ！あげくの果てには、生徒会が急に動かなくなりやがった。こんな時に動けなくて、なんのための応援団なんだよ！」

シュカの怒声が部室をふるわせた。

……怖すぎる。ふだん触れることのない爆発的な感情に圧倒され、タケオは後じさった。

リンさんから目を離れたシュカは、赤いグローブを両手にはめた。パリパリッという小さな破裂音と、細く青白い火花。細い拳に、敵と同じ電撃の殺意がこもる。さらに、ロッカー内の、充電器のようなスタンドから大ぶりのヨーヨー（！）を外すと、グローブの中に握りこんだ。

手首を軽くスナップさせると、意思を持った生き物のように、ヨ

ーヨーがシュカの手をまわりを踊った。回転させる度に青白い光が充填されていく。タケオは口を開けてのけぞった。さっきの戦闘で、電磁刀や銃と戦っていたのはこれだったのか！

「行っとうするの」

リンさんがやさしい声を出した。吐き出すようにシュカが答える。

「決まってる。SEARCH& DESTROY」

——見つけ出し、殲滅する。その言葉の響きに、ノアまでが心配そうに振り向いた。

「闇社会のダチどもを総動員して、一斉に『狩り』をかける。見つけたやつからババやチィと同じ目にあわせる。いや、生きていることを後悔させてやるよ」

ばしっ、と肉を打つ音が響いた。

シュカの手からヨーヨーが耳障りな音を立てて落ちる。床の上で何秒間か回転した後、静寂が訪れた。

「……なぐって悪かったわ。でもあなたはもう獣ではないのよ。このヨーヨーをいかに使わずに済むかが私たちの誇りなのよ。この校章をつけている限り、その腕章をつけている限りね。……こんな感情にあなたのすべてを支配させてしまっってはだめ」

シュカは横をむいたまま動かない。結構強い力で殴ったのだろう。唇の端が切れている。

「あなたを信じているひとの顔を思い浮かべてみて。わたしたちには、まだできることがあるわ。ありすにもう一度話にいきましょう。ノアも、エミリーもハルカもいる。あなたが武器となる時は、わたしたちも一緒にいる。そうでしょ？」

リンさんはかがむと、シュカの手から落ちたヨーヨーを拾った。シュカの背中がこきざみに震えて、開いたままのロッカーの扉を関節が白くなるまで握りしめる。が、先ほどの怒りの勢いはなかった。

「でもよ……だけどよ……」

シュカの口からとぎれとぎれの吐息と、痛みをこらえるような声がもれる。

タケオはそっと目をそらした。

リンさんは、優しくシュカの背中に手をそえると、ノアに向かって告げた。

「少しのあいだ、校内をご案内さしあげて」

ハムスター少女が、押忍！ と叫んで、ボクの足下にかけて来る。

「さっ、行きましょう！」

手を引かれるままに、部室を後にした。

ロッカーに両手をつき、嗚咽を押し殺すシュカのシルエットが網膜に焼きつく。

なあ、ほんとうにお前にできることはないのか？

もうひとりのタケオが、心の中で声をあげた。

当たり前だ。ボクは部外者だ。ないに決まってる

じゃあこの痛みはなんなんだ？……タケオをその声を黙殺した。

第15話：支えあうもの

ハムスター少女、もといノアのあとについて校内を歩きながらも、シユカの慟哭する光景が忘れられなかった。

「あぶないよっ！」

ノアが短い手を伸ばして、タケオの袖を引っ張った。鼻先をかすめるように、舞台の書き割りのようなパネルが通過していく。きつと文化祭の出し物だ。

あいかわらず校内は文化祭の準備をする学生でにぎわっていた。どうして『学校ごっこ』にこれだけ真剣になれるんだろうか……？
いつしかタケオは高校生の頃を思い返していた。どうせ活躍できない体育祭は、応援に夢中になるクラスメイトを冷たい気持ちで眺めていた。文化祭では、教室展示の店番のノルマを果たすと、ネカフェで時間をつぶした。学校でみんなで力を合わせて何かする、という行為はいつも嘘くさく思っていた。

「あーノアっち、オレの新兵器見た？」

急に横から声をかけられた。

やたらめったら濃い顔をしたヒゲ面、黒ぶちメガネの男が話しかけている。……30歳は越えているかもしれない、夏服のワイシャツが、メタボ腹ではりさけんばかりだ。右手にはまだ煙の上がるハンドごてを握っている。ノアも良く知っている仲らしい。

「見てませーん。それどころじゃありません。それよりノアの専用バイクはいつできるの？」

「うーん、カブかパツソルだったらすぐできるんだけどねえ」

「やだやだ！ 団長みたいにカッコイイのがいい！」

「足も届かんくせに……」

「なにをー！ メガネ割るぞ！ このデブ！」

呆然として気の抜けた漫才を眺めていると、ヒゲメガネが、タ

ケオの存在に気づいた。

「こちらの見ない顔の男子は、見学の方？」

ノアは、すっかり忘れていた様子で、ボクをふり返ると、

「こちらは、団長の客人で……えーと、タケルさん！ 1年のチィちゃんのお兄さんで、サムライボーイズせん滅作戦に協力してくれるそうです！」

タケオはノアの背中をにらみつけた。名前は違うし、せん滅作戦ってなんなんだ。

「おお、心強い！ 工作部部长兼武器職人のオオタムラケンジっす。通称オタケン。33歳、既婚で愛妻と愛娘がいます！ えーっとね今、娘の写真見せるね」

そんなもん見せられても……だが、武器と言えば、シユカのスタンガン仕込みのグローブや、あの電撃ヨーヨーはこの男が作ったのか？

「あの……ひょっとして応援団の武器は……」

「まいったなー、俺有名人？ あ、さっき襲撃に巻き込まれたヒトかあ。じゃあシユカの新兵器『超電磁ヨーヨー』を見たでしょ！

応援団にさまざまな武器を供給する死の商人とはオレのことさ。むははは。つーか、ノアっちもつと国防予算つけてよ」

「あーもううるさい！」

「あの、サムライボーイズは、銃とか持ってたんですけど……」

「あー電磁銃ね。さっきリンから預かったよ。まー電磁銃自体は、そんな珍しいもんじゃないよ。現行の銃刀法では規制ができないから、警備会社なんかでも採用してるくらいだ。特に、ワイヤー付の高電圧を帯びた針を射出するタイプは良く見かけるね。だけど今回現場で拾ったタイプはちよつと違う。大口径のスタンマグナムって呼ばれてるやつだ。特殊な帯電非金属でできた弾丸を電動で射出する。弾丸には電磁銃より高圧の電流が流れているから、撃たれる場所によっちゃ、意識不明になったり、心臓が止まったりするかもね。これはたぶん銃刀法違法かなー」

オタケンが、目を輝かせながら解説をはじめた。この人はまともではない。タケオは心のプロフィール帳に『要注意』とチェックを入れた。

「電磁銃って、そんなカンタンに手に入るものなんですか？」

「んー。マグナムに関しては、そんじょそこらの坊主が買うにはちとつらいかな。裏社会とのコネもいるし、安くても1丁、20万はするんじゃない？ ほとんどのパーツがプラスチック製だし、中国でライセンス生産してるから値崩れはしてるけどね」

なぜ、サムライボーイズは、そんな高価な武器を持っているのだろう？ そんな疑問がタケオの頭に浮かんだが、オタケンがでかい顔を、ぐいっと前に出して来たので、どこかへ霧散してしまった。

「タケルくんだっけ？ なに？ 銃に興味あるの？ なんなら工作部に入る？ 今なら量産型超電磁ヨーヨーをもれなくプレゼントしちゃう！ しかも限定版のパールブラック塗装！」

「いらんいらん、さ、客人は先を急ぐのでまたねー！」

タケオの手を引いて、ノアが歩き出した。

「ノア！」後ろからオタケンが呼んだ。

「ババのケガのこと、聞いたよ。オレも、みんなも、これくらいでびびったりなんかしねーぞ。なんかできることあったらいつでも言えよ！」

タケオの半歩前を歩いている足がぴたりと止まった。

学ランの詰襟からのぞくうなじが、少し紅く染まるのが分かる。

ノアは深く息を吸い込むと、ふりかえって笑顔でさげんだ。

「応援団を応援してどーすんの！……ゼッタイ成功させるよ！」

第16話：翼を求めるもの

その後、部室棟、講堂、体育館と併設された柔剣道場と、ノアの明るい声での案内が続いた。

そんなに大きくもない敷地だが、この生徒数ではまだ余るのか、使われていない教室も多い。外から見ると限り、今にも廃墟になりそうなほど老朽化しているように見えた校舎だが、意外と内装や設備はちゃんとリフォームされている。

「でねー、自分はシユカ姉と、リン姉に憧れて入団したんですよー」
いつの間にか、ノアの話は学校案内から、身の上話にシフトしている。団長と呼ばなくていいのか？

「あたしはー、となり街で武闘派なギャルサーやってたんだけど、その時すっごいやな奴らに目えつけられちゃって、もうダメだっと思ってた時に、んふふふ。二人が風のように現れて、ばったばったと悪い奴らを倒しちゃったの！ もうその時のシユカ姉の美しさだったら！」

バンバンとタケオの背中を叩く。

「当時はまだ未成年だったから、この学校に入れなかったんだけどー、今年の四月にやーっと入学してね、応援団に入れてください！ つつて土下座したの。最初はダメって言われたんだけど、部室の前で3日3晩お願いしたら、意識失っちゃってー、病院運ばれて目が覚めたら、ベッドの上に学ランが置いてあったの！ うくく！ あ、美術部だ。見てく？」

突然ノアが回れ右をして、部室らしき部屋に入っていた。タケオもあわてて後を追う。うす暗い室内の中は、油絵具と強い木の香りがたちこめていた。

「この学園の美術部はねー、絵を描くのもそうだけど、彫刻とかも

やるのね」

ノアがごそごそと、手さぐりで教室の電源をさがす。

「チイちゃんから聞いてるか、あ、あった。誰もいないじゃーん」

白色の蛍光灯が教室を照らしだす。いかにも美術部らしい石膏像や、壁にかけられた風景画をバックに、2 m以上ある巨大な立体物がそびえたっていた。

彫刻用の木材を組み合わせた土台から、少しずつノミをふるって作り上げたのだろう。今まさに飛び立とうとする、大きな翼を持った女性像だった。体まではほとんど完成しているが、顔や羽はまだ荒彫りのままだ。

「……すごい、これをチイが？」

「毎年文化祭では、スクールシンボルって呼ばれる、大きなオブジェを展示するのね。今年は、チイちゃんがプレゼンを勝ち抜いて、三月くらいかけてここまで作ったの」

足下に転がったサンドペーパーや、木クズをよけるように、ノアは像のまわりを一周した。

「チイちゃんは、あたしと同じ学年なんだけど、入学当時はちょっと対人恐怖症はいつていうか、超おとなしー感じだったのね。でもやっとなりたいものができたっていつて、夏前からいつしようにけんめい作ってたの」

脚立の足に、大判のスケッチブックが立てかけてあった。なんとなく興味を引かれてページをめくると、そこには膨大な量のラフスケッチがあった。ひと目見た瞬間、タケオは確信した。

「このモデルは……シユカ？」

実際、シユカを写実的にとらえたクロッキーも混じっていた。窓際にたたずんでいるシユカ、学ランを脱いで、まっすぐにこちらを見つめるシユカ。

「あーわかつちゃった？……チイちゃんは、シユカ姉のところに行つて、モデルをお願いしてたの」

タケオは、あらためて天を突くような作りかけの女性像を見た。
未完成ながらも、すでにシユカの特徴や骨格が反映されているのが
わかる。不思議なことにチィが、どんな完成像を描いていたのか、
鮮明にイメージすることができた。今の自分を変えて、少しでも強
くなりたい。前に進みたい。そう思ったのだろう。そつとスケッチ
ブックを元の場所に戻すと、タケオは小さく息を吐きだした。

「つくりかけの像って、寒そうだね……かわいそう……」
小さく、ノアがつぶやいた。

第17話：新たに立つもの

美術室から一階へと続く階段を、タケオは無言のまま降りた。察したのかノアのおしゃべりが止まっている。

像を見た時の心の震えが、まだ止まらない。

くそつたれ。なんで今までチィと話そうとしなかったんだ。あんなに……。

「ノア！」

タケオの思考を打ち破るように、大きな呼び声がした。

振り向くと、昇降口の下駄箱の前にふたりの女性が立っていた。

応援団の証ともいえる学ラン姿に、腕章。パトロール帰りなのか、小脇にヘルメットを抱えている。

「エミリー姉！ ハルカ姉！」

ノアの表情がぱっと明るくなる。

エミリーと呼ばれた娘は、たぶんストレートの日本人ではないだろう。バランスの取れた長身に、南の国の血を感じさせる褐色の肌。乾いたプラチナ色のスパイラルパーマの前髪の間から、タケオを興味深そうにのぞく瞳が異常に色っぽい。はだけた学ランの下にはピントのポロシャツ。どミニスカの指定スカートから伸びる二本の足に、釘付けになる危険性を感じたタケオは、その隣に立つ女子に視線を移した。

ハルカという娘は、華奢な身体に少し大きめの上下の学ラン姿だ。他の団員とちがって、つめ襟のホックをきちんと閉めている。少し長めのボブカットの前髪が、目をおおっているため表情がわかりにくい。だがタケオの直感是这样こう告げていた。……この娘、結構な「隠れ巨乳」じゃないか？

ノアが心配そうな声で話しかけた。

「襲われた生徒の具合はどうでした？」

「ババ、骨折。全治四週間。他ノ子たち、ショック受ケテル。帰ラセタ」

少し硬いアクセントだが、簡潔で聞き取りやすい発音だった。エミリーは、ばさばさするほど長い睫毛を伏せて、ヘルメットでつぶれた髪に空気を入れた。タケオの鼻先まで甘い南国の香りが届く。

前髪ごしに目線を上げたハルカが、ささやくような声で訊ねた。

「……どちらの方」

借りた制服を着ていても、部外者はすぐわかるらしい。

ノアの間違いだらけの紹介がはじまる前に、タケオはさっさと自己紹介をした。

「昼間部のチィの兄の、タケオです。夕方にチィと一緒に襲撃を受けたところを、シュカさんに助けられました。今はノアさんに学校の案内をしてもらってました」

「……翠谷ハルカ（みどりやはるか）です」

ハルカは数ミリだけ頷くと、表情を変えずに名のり返した。……あまり歓迎されていないのかもしれない。割り込むようにしてエミリーが右手を差し出した。

「チィの兄貴カー。似テルツチャ似テルカ？ イヤ、似ナクテ良カッタノカ。小金井・エミリオ、（こがねい・えみりお）、ツウショウえみりーネ」

ピンク色のぷっくりした唇から白い歯がこぼれると、まわりの空気が明るくなる気がした。とまどいながら手を握りかえす。マウスより重いものを持ったことのないタケオの手のひらより、はるかに厚くがっしりとした筋肉に覆われていた。

とにかくバリーエションの豊富な部だ……しかも全員に個性的な魅力があって正直迷う……いや、嘘だ。シュカにはかなわない。タケオは心の中のボイスレコーダーにぶつぶつと感想を記録しつづけた。

「えーと、タケル？ タケオさんは、サムライボーイズのせん滅作

戦とお、スクールシンボルの制作を手伝ってくれます！」

超個人的な妄想にひたっていると、ノアの口から卒倒しそうな台詞が飛び出した。何を言ってるんだ、このハムスターは！ 反論しようとする前にハルカが呟いた。

「……ほんきで」

「ええ、はあ。まあ……。いや、仕事もあるんで、いつまでいられるかは約束できないんですが」

ハルカの視線が、タケオの左手の包帯に注がれる。

「……つぎは怪我じゃすまない」

言外の圧力がどんどん大きくなる。いや、やっぱ無理です。おとなしく帰ります。弱気の虫がうぞうぞと巣穴からはい出して来る。

「オドシテドースンダヨ。気持チハアリガタクモラツトケヨ。タダ……」

突然、同じ校舎の上の方で、ガラスが割れる音が聞こえた。一拍遅れて、悲鳴。

エミリーとハルカが、顔を見合わせる。

ハルカが昇降口を上履きのまま、中庭に向かってかけだす。振り返って校舎全体を見上げると叫び声を上げた。

「……西・四階、生徒会室！」

「のあ！来イ！」

言うが早いのか、エミリーの長い足が二段抜かして階段をかけあがる。歩幅のせまいのか、必死で食らいつくノアが、踊り場で振り返った。

「タケオさん、ハルカ姉と一緒に、保健室に！」

呆然としているタケオに後ろに、ハルカが立っていた。

「……こっちよ」

「いや、忙しいでしょうから、場所を教えてもらえれば……」

ぴくりとも表情を変えず、立ったままタケオを見ている。なんなんだ。この娘は。おっかない。

「はい。ついてきます。」
また数ミリ頷くと、ハルカは、暗い廊下を先に立って歩き始めた。

第18話…居場所を探すもの

「い、行かなくていいんですか？」

極めて正確な歩調でタケオの前を歩く、ハルカの背中に声をかけた。

さっきの轟音が起きた現場を確かめようとする、何人かの学生とすれ違った。

多くは角材などで武装しているようだ。戦場を思わせる乾いた空気、タケオの

のどはからからだった。沈黙には耐えられない。説明がほしい。何かをしゃべって
いないと精神が持ちそうになかった。

「生徒会室って言ってましたよね……？あ。まさかシユカが……？」
ハルカが足を止めた。タケオの心臓がはねあがる。まずい。

「少しだまれ。臆病者」

重い前髪のすきまから覗く、深緑の瞳が真つすぐにタケオの顔を射抜いている。

それでも言葉を続けようとする唇と、よせと止める理性が交差し、タケオは頬を熱くしたまま、うつむくことになった。

再び、ハルカが前を向きなおった。1歩目と同時に呟く。

「やれることをやる」

タケオにかけた言葉なのか、すべての行動の説明なのかわからなかったが、

唯一の言葉に、タケオも黙って歩きだした。

保健室の前まで来ると、ハルカは左腕に巻いた腕章を、入り口のセンサーにかざした。

プシュツという圧縮音とともに、扉が開く。

中には、弱冷房が効いた空気と、カーテンが閉じられた2つのベ

ツド。そして事務椅子に

腰かける、白衣の初老男性がいた。

肩まで伸びた、無造作にうねる硬そうな銀髪が頭が振り返る。太い眉と、ここだけは

手入れをかかさないとされるカイゼルひげが、ぴんと突っ立っている。どこか、老いて船を

降りることになった『艦長』を思わせる風貌だ。

「けが人が来る」

ハルカが告げると、艦長は、少しの間四階の方向に目をやっていたが、とんとんと、

腰のあたりをたたきながら立ち上がった。いつからいたのか、膝の上で丸くなっていた

三毛猫（！）が飛び降りて、不満げな声をひとつあげた。

「具合はどうだね」

艦長が、カーテンの向こうへ声をかける。しわがれていても、語尾に張りのある不思議な声だ。

「はい。もう大丈夫です」

ジャツと、カーテンが開いて、ジャージ姿に着替えたチイが顔を出した。

「悪いが急に大繁盛だ。場所をゆずってくれるかね？」

「寝たら、元気でました。ありがとうございます」

チイの頭が深々と下がる。昔の妹は、こんなにはっきりとあいさつができる奴じゃなかった。

ふと、艦長の後ろからのぞきこんでいるタケオに気づくと

「おにーちゃん、制服似合わないねー」

とへらず口をたたいた。やっぱり変わらない奴だ。

「しかし、どこへ…」

居場所を転々としているタケオは、心もとない気持ちで呟いた。

艦長が、振り向いてタケオの顔をまじまじと見つめる。

「不器用そうだが猫の手よりマシか。手伝え」

午前2時。事務机に場所を移した猫が、くしゃみをした。

それからの1時間は忘れようにも忘れられない。

4階の生徒会室から次々に運び込まれている怪我人の対応に、タケオは翻弄されっぱなしだった。

外に面した窓ガラスを簡易ロケット弾で破壊されたく、多くの受傷者はガラスの切り傷で

血に染まっている。

艦長が、手早く重傷者を見極め、ハルカの運転する車両で病院に運ばせる指示を飛ばすと、

ルーペを片目にはさみ、ピンセットで細かなガラスの破片を抜く処置が始まった。

もちろん抜かれる方に麻酔などはない。痛みをこらえるうめき声に、タケオの足は震えた。

「おにーちゃん。手伝って！」

チイがジャージを血で汚しながら、蒸気を上げる大きなヤカンを下ろそうとしていた。

タケオは、チイのギブスで固定した指から、ヤカンを取ると、火にかけてタライにお湯を

注いだ。再沸騰させると、艦長が使ったメスやピンセットをぶちこんで煮沸消毒する。

ふきんの上にあけて水気を取ると、お湯を入れ替えてその繰り返し。

「ガーゼを出せ！足下の棚だ。右！」

「床の血をふけ、すべるぞ！」

合間に、縫合を始めた艦長のがらがら声が飛んでくる。大きい声で返事をしないと

負けてしまう。いつ間にかチイは看護師役で、不自由な手を忘れたかのように、消毒から

包帯巻きまでをこなしている。

濃い消毒薬の匂いから逃れ、モップに洗いに廊下へ出ると、まだ

10人ほどの怪我人が座り込んでいた。

軽症らしいが、みんな白い顔でへたりこんでいる。

「……まだ、かかるんですか？」

泣いている女子学生のつきそいのおばさんがタケオに目をむいた。不思議に、『関係ない』とは思わなかった。

「すいません。先生もがんばって急いでます。欲しいものはないですか？」

女子学生が、紫色の唇を震わせて、さむい……と呟く。

見ると並んでいる人の多くが、ショツクのせいなのか両手で体を抱えるようにしている。

「毛布持ってきます」

タケオはチィに声をかけると、備品倉庫へ走った。

第19話：再びつながるもの（前篇）

怒濤の一刻が過ぎた後、タケオは保健室の入り口に丸イスを出して座った。

腕時計を見ると、午前三時を過ぎているが、緊張にさらされた頭は覚醒したままだ。

チイが、ステンレスのカップに入ったコーヒーを持ってきてくれた。艦長からのねぎらいらしい。

椅子をゆずってチイを座らせると、カップに口をつけた。熱く濃い液体が、胃へ落ちていく。

「散々な一日だったね」

手の中のコーヒークップを揺らしていながらチイがぽつりと言った。

「ああ……でも色々わかったよ」

タケオは、部室でリンさんから説明を受けたことと、ノアに校内を案内してもらったことを話した。

「ええーっ！　じゃスクールシンボル見ちゃったの！　ありえない！　狭い廊下にわめき声がこだまする。うるさい奴だ。」

「……手伝わせようと思ってたくせに、イミわかんねえなあ。つか、すげえじゃん」

チイが顔をおおっていた両手をはなして、タケオを見た。

「なんか……もっとくだらねえもんを作ってるんだと思ってた。正直、あんな彫刻オレには作れねえよ。感動っていう言い過ぎだけど、すげえと思ったよ。おまえ、なんか変わったよ」

チイが、ギブスに包まれた指でカップを床に置くと、小さな声で、そんなことないよと首をふった。

「その手のケガも、サムライボーイズにやられたのか？」

「……二日前に、買い出しに行こうとした軽トラックが襲われたの。踏まれてヒビが入った程度だけど、ハンマーが持てなくて……美術部の友達も、怪我したりショック受けてりして……その日いい学校を休んでる。アタシどうしても、あの像を完成させたかったの。みんなもうやめたらって心の中で思ってるかもしれない。でも、これはアタシの戦いなの。ここで逃げたら、また昔のアタシにもどっちゃうよ」

チィの口から言葉がこぼれおちる。タケオがずっと目をそらし、聞こえないふりをしてた言葉だった。

「絵を描くのも粘土もだいすきだったけど、中三の時の美術コンクールで賞をとった後、みんなに調子の上って言われて、学校いくのがつらくなったの。高校も一日でやめちゃって、お父さんとお母さんも暗い顔してたよね。あたしは夜中じゅうずっと、居場所がありそうなネットにくっついて、早く世界がなくなればいいのになって願ってた」

タケオは高校時代を思い出した。いつでも閉まっている妹の部屋のドア。父も母も全精力をかたむけて、妹を家からひっぱりだそうとしていた。自分の家族がゆがんでいく姿を見たくなかったタケオは、いつもゲーセンで時間をつぶしてから帰るようになった。

「こないだ、おかあさんに聞いたの。おにーちゃんもずっと絵とか好きで、美大行きたいって言ってたけど、浪人する余裕がないからって、あきらめて就職ができる専門学校に進んだんでしょ？」

チィの手が何度もかたちを変えて組み合わせられる。タケオは目を閉じて一気にしゃべった。

「……本当はこわかったんだ。自分の才能なんかたいしたものじゃない、って知ってしまうのが。あの時、オレは戦う前にやめたんだ。お前のせいにしたこともあったけど、さっきあの像を見た時にわかった。本当にやりたいことがあるなら、どんな怖くても、あきらめられないはずなんだ。チィ、お前はやっと見つけた居場所でま

だ何か作ろうとしてるじゃないか……あのスクールシンボル、オレが手伝うよ。たぶん完成できると思う」

チイの肩がこわばって、そのうち小刻みに震えだした。涙と鼻水が、ぼとぼと床に落ちる。

「あーもー、きたねえなあ」

タケオは、チイの頭を軽くたたいて保健室に戻った。目の前に、机に突っ伏すように震えている艦長の背中があった。心配そうに鼻を近づける三毛猫の姿に、タケオは大きな声を出した。

「どっか痛いんですか！」

顔を上げた艦長は鼻をひとすすりすると、

「大きな声をだすな……年寄りには涙もろくていかん」

としわがれた声を濡らしながら、ティッシュ箱を差し出した。

第20話：再びつながるもの（後篇）

5分も泣いていただろうか。

タケオは、ようやく話が続けられようになったチィに、シユカとの出会いをたずねた。

「この学校を知ったのは、去年の夏だったの。馬鹿みたいな話だけど、学園もののドラマを見てたら、学校に行きたくなって。でも20歳こえてる、ってカウンセラーの先生に話したら、ここを紹介してくれたの」

チィの表情が、ふいに優しくなった。そうだ不登校になる前の妹は、よくこんな顔をしていた。

「見学を申し込んで、体調がいい季節だったから、ひとりで行ったんだ。その時に校舎を案内してくれたのがシユカだったの。ああ、ここにもヤンキーがいるって、思ってた身がすくんだ。校内を案内しているんだけど『そこ職員室』『そこ食堂』くらいしか言わなくてあまりにサービス精神がなさすぎて唾然としたのをおぼえてる。でも、終わりぎわに、アタシの方に振り向くと、

『あたしもこの学校もあんたを救うことはできないけど、あんただけは、あんたを救えるよ。キョーミがあるなら、明日の朝6時に、校庭に来な』

って笑いもせずに言うんだ。

それまで、フリースクールも、専門学校も沢山の言葉をくれたけど、どれもアタシには立派で、まぶしすぎたの。……シユカの言葉はそんなこと言うか！って思ったけど、この人は嘘はつかないようにしてるって思った」

タケオはうなずいた。

「で、朝六時に行ったのか？」

「寝ちゃうと起きれないから、徹夜して行っただの。そしたら……」

「そしたら？」

「朝練やってた。応援団が」

「朝れくん？ フレーフレーってやつか？」

「それ。学ラン着て。その頃はノアがいなかったから、4人で」

「引かなかったのか？」

「正直引いたよ……でももうシュカと目が合ってるからね。逃げ出せない。結局、練習が終わるまでずっと見ていたんだ。……不思議なもので、はじめはダサいつて思っていたけど、4人がきれいに声を合わせたり、型がぴたつと合うのを見てみると、妙にすがすがしいっていうか、ぐっときちゃって」

「みんな美人だしなー」

「それもあるかもね……でもどちらかと言うと、シュカ達のキラキラ感にやられちゃったのかな。ああ、あたしはずっとこれを失い続けてきたのか……とかね。30分くらいで練習は終わったんだけど、そこでまたシュカが言うの。『明日また同じ時間に来いって。ビデオ係をやれ。』って」

「なにそれ！」

「なんだか世界応援団大会の予選に送るとかで」

「あんのかよ！」

「知らない。それから3日間ビデオ係をして、いつの間にか入学してた」

……チィの笑顔は本物だった。歩道橋の上で会った時に存在したふたりの間の壁が、いつの間にかうすくなっている。幼い頃、捨て猫を拾ってしまい、ふたりで引き取り手を求めて、近所をうろつきまわったことや、台風の日窓の外を荒れくる風と雨を、ふたりでじっと見つめていたことを思い出した。

なごんだ気持ち、食堂のスピーカーからの音声によってふきとんだ。

「生徒会より連絡します。経営会、部活動組合、文化祭実行委員会との協議の結果、本日土曜日の朝6時をもって、文化祭の中止を決定します」

チィがタケオの顔を見る。青ざめた唇が、まさかという形に動いた。

「これから中庭仮設ステージにて、生徒会から今後についての説明をします。説明後は全員帰宅となります。今すぐ、文化祭の準備作業を中止して、中庭に集まってください。くりかえします……」

にわかに廊下の先の階段が騒がしくなる。あちこちの教室でドアが開く音が聞こえた。

「どうということなんだ？ 警察が介入するのか？」

「……わからない。どうして……いっしょうけんめい準備してたのに」

「生徒会ってそんな権限があるのか？」

「最終決定権はあると思う、でも、ありすがそんなことを言うなんて……」

「アリス？」

「今の生徒会長よ。シュカと同じ二回生の女子なんだけど、みんなからすごく慕われてるの」

「その娘が決めたなら、文化祭が中止になんのか？」

「わかんないよ！ アタシだって今聞いたとこなんだから！」
タケオはぶすつとした顔で立ち上がった。

「とにかく中庭に行くぞ」

チィが大きくうなずいて、冷えたコーヒーを飲み干した。

第21話…耳をかたむけるもの

朝4時。夏の朝陽が登る寸前の一番暗い時間。

タケオやチィは、不安げな表情の学生たちをかきわけて中庭のステージの最前列を目指した。

中庭の中央に設置された作りかけのステージと、夜明け前の闇を切り裂く工事用の照明。

ステージを取り囲むように立つ、オレンジ色のジャンパーに染め抜かれた「生徒会」の文字。

説明を求める学生たちが、ステージを十重二十重に囲んでいる。困惑と不満が入り交じる空気は、分刻みでその濃度を増し、すでに最前列では小競りあいが始まっているようだ。

ようやく3列目までたどり着いたタケオは、素早くシユカ達の姿を探したが、見つけることができなかった。

「ちいたあしずかにせんか！ 大人じゃろうが！」

キーンというハウリングと共に、なまりの強い、聞く者をねじふせるような怒声が頭上から鳴りひびいた。

振り向いたタケオの視線の先には、ステージ上に仁王立ちする長身の男の姿があった。

和風のライオンを思わせる、全方向に広がる硬そうな黒髪。青筋の浮いた猪首と四角いアゴ。

太い眉毛の下に鎮座するぎょろりとした眼光をフルに生かして、詰め寄っていた学生を黙らせる。

着古した制服ズボンにサンダル姿。盛り上がった肩の筋肉の上には、生徒会のジャンパーがひっかけてある。

タケオは隣のチィに、あれがありすなの？ と聞いてみたが、無視された。

「生徒会副会長のクガじゃ。みんな色々ゆいたいこともあるじやろーが、まずは座ってつかあさい」

ふいに口調をゆるめて笑顔を作ったクガは、スタンドマイクを前に、ぐるりと集まった面々を見わたした。

興奮していた学生たちが、周りを見渡しなからばらと腰を下ろしはじめる。たいした迫力だ。

太い首に息を送りこんで、クガはしゃべりはじめた。

「今、この星くず学園は未曾有の危機に見まわれとる……ミゾウって漢字かけるか？ わしやあ書けん。そがあな低学歴のわしが愛してやまないこの学校を襲う事件が、相次いで起こつとる。今日だけで2件。被害者は9名……やったなあ誰じゃ？」

サムライボーイズだ！ 怒りの声がおこる。生徒会と学生とのコール&レスポンス。普段はそれなりに信頼関係があるのかもしれない。

「わしやあ憎い。サムライなんちゃらと名乗る卑怯モンらが憎くてたまらん。みんなと同じか、それ以上じゃ。わしも文化祭を楽しみにしよったんじゃ……じゃけえ生徒会はずっと話し合いを重ねてきた。文化祭をどーにか、無事に続けるための会議を」

中庭の温度がじわじわと上がる。タケオと肩が触れるチィの体温も心なしか上昇している気がする。

「じゃが、さっき状況が変わったんじゃ。みんな、わしの話じやーのうて、会長の言葉が聞きたくて集まったんじやろう。ありすの声を」

クガの顔がゆがんだ。一斉にざわめきが広がる。

「ありすが撃たれた。ついさっきじゃ。4階生徒会室の、道路に面した窓ガラスごしに、ペットボトルランチャーが撃ち込まれたんじや……ありすは、窓の近くにおった、他の生徒をかばって、ガラスの破片を浴びたんじゃ。さっき病院に運ばれたが、顔に傷が残るかもしれない……！ ほんまに、神も仏もない世の中じゃ……！」

ガツツと音がして、タケオの足下に、ペンキを塗るスポンジロー

ラーが飛んできた。隣に立っていたタオルを頭に巻いた男子学生が、塗料にまみれた両手を顔にあてて、ちくしょう、とうめき声をあげた。

「撃ちこまれた弾にゃあ、サムライボーイズからの手紙がついとったんじゃ。これから読むぞ」

かさり、という紙が開く音を、ハンドマイクがひろった。

「われわれはこの国の行く末を憂う侍である。

この国に税金を納め、この国の未来に希望と責任を持つ者である。しかし近年、なまけた心を持ち、責任を他人に押しつけ、国民の義務を果たさず、

自我ばかりを肥大させて、われわれが作った社会を食いつぶす蟲が増えていく。

蟲どもは国を疲弊させるのみならず、時に凶悪犯罪を起こし、われわれの社会に大きな傷を残すが、罰せられることは少ない。われわれは、蟲どもを断罪し、処刑するために結成された侍の軍団である。

われわれはこの街に巣くう無能力な蟲どもに天誅を下すことにした。

蟲を飼い蟲を再生産する学校、蟲を保護しようとする愚者たちも同罪である。

われわれは昨日から何匹かの蟲を狩った。次は蟲どもの不毛な祭りの中止を命ずる

祭りが中止されなければ、さらに多くの蟲の命が消えることになる。

われわれを見つけないことはできない……」

クガは犯行声明を読み終えると、太い指でまっぴたつに引き裂いた。

2つが4つ、4つが8つと、足下に紙片が次々と舞い落ちる。

「死にゃーええが、こんなヤツら……！」

四角いあごが吐き捨てるように動いた。

「思想も脳味噌もないクソつたれの戯言じゃ。じゃけん……襲撃が始まって一週間が過ぎても、いまだやつらのアジトを特定することができとらんのも事実じゃ」

クガの口調に苦いものが混じる。

「みんな知っとるじゃろうが、ウチの学校と、警察との関係は良好とはいえん。いま警察が介入すりゃー、文化祭の中止どころか、学校の運営停止も予想ありえるんじゃ。ほいじゃが、こんだけの被害が出てしもーた今、自力でみんなを守ることは危険すぎると判断した。海外視察中の理事には連絡が取れとらんから、むしろ生徒会は、経営会、部活動組合、文化祭実行委員会、の四者と協議した結果、サムライボーイズからの生徒の保護と、学園の存続を最優先課題として、今回の文化祭の中止を決定したんじゃ……みんな、ほんまにすまん」

クガが、板張りのステージの床にヒザをつくると深々と頭を下げた。いまや聴衆は水を打ったように静まり返っている。クガが顔を上げた。

「……以上の理由にて、今日この時点をもって学生は解散とする。

土曜日……もう土曜日か。と明日の日曜日の登校は禁止。意見のある人についてちゃー、個別に生徒会が対応するけえ。帰宅についてちゃー、もうすぐ始発が動きだすんで、それを利用してくれ。最寄り駅までは生徒会がパトロールする。気いつけて帰ってつかーさい……」

たんたんと言葉をつなぐ副会長の語尾が終わる寸前、甲高い爆音が校門の方角で鳴り響いた。2台、3台と、バイクが停まる音が重なる。

かすかに、朝陽が昇り始めた薄紫色の校門をくぐって、応援団の5人がステージを見据えてまっすぐに歩いてくる。

中庭の敷石をたたくラバーソールの音。学ランの裾が一步ごとに

風をはらむ。

先頭のシュカの後ろには、リン、エミリー、ハルカ、ノア。シュカの口は一文字に結ばれ、とび色の瞳は煌々と燃えている。

ステージを囲む人垣がふたつに割れて、朝陽を背負った一団はステージの最前列までたどりついた。

第22話..星を捨てるもの

シュカとリンが、体重を感じさせない身の軽さで、ステージの上に立った。

赤と黒の髪がふわりと揺れて、元の位置におさまる。

副会長がゆっくりと立ち上がり、シュカの方に向き直る。

「クガ、ずいぶん話が上手くなったじゃねえか。実家のお寺を継ぐ決意でもしたのか？」

シュカのマイク要らずのハスキーボイスが、真っ向からクガへの銃撃を開始した。

「おまえの言ってることはいいちい正しいよ。でも根っこにある気持ちはどうなんだ。文化祭が中止になってほっとしてんじやねえのか。くやしいけど、でもしかたがない。そう思っくんじやねえのかよ。あいつらが、文化祭をぶつつぶしたくらいで満足するわけねーだろうが。次は運動会か、卒業式か？ その度にごめんなさい、弱いんで戦えません。命だけは助けてください、ってお願いしながら、頭を下げて生きてくのかよ」

「シュカ、これは決定事項じゃ。今後のことは追って協議する」

「待ってください」

シュカの隣で、冷静な目を向けていたリンさんが割ってはいった。

「団長の暴言はさておき、わたしたち応援団が、文化祭の中止を決定する場に呼ばれていないのはなぜですか？」

話を打ち切って、ステージを降りようとしていたクガの動きが止まる。

「……応援団は二年前の校内事件の解決を評価され、学内外の治安維持をまかされています。これまでも重要な議題の決定の場には、経営会、部活動組合、生徒会とともに決定権を持って参加させても

らっていたはずです」

リンさんの声は、おだやかだったが、一步も引かない気迫にみちている。

クガがにらみつけるように息を吐いた。

「それも後ほど説明する……じゃあ聞くんじやが、応援団はどうしたいんじや？」

「文化祭をやるべきだ。たとえ半日でも、1時間でも」

隣に立つシユカが間合いを詰めるように言い放った。リンさんが後を続ける。

「私たちが一番おそれているのは、被害の拡大ではありません。見えない敵からの暴力によって、心が折れてしまうことが一番こわい。生きる場所が見つからなくて、長い旅の果てに偶然集まったわたしたちです。やっとたどりついたこの場所を、また失意と絶望のうちに手放してしまうのですか？　そもそもこんな時のために応援団が存在しているのではないのでしょうか。私たちは、この学校を守り、戦うために武装をゆるされているのではないですか？」

隣を見ると、チィが両手を口に当てて、涙をこらえている。

正直、タケオ自身はさっきのクガの意見に納得していた。それは大人の考え方だった。

……でも他にも道があるとリンさんは言っていた。その道は険しいから誰もが見ないふりをするのだ。

副会長が、腹にひびく低い声を出した。

「そがぁに血を見たいんか、リン。文化祭をエサにサムライボーイズをおびきだして、たたくつもりじゃないんか？　それまでに何人の生徒が血を流すんじや？　それで捕まらん時は、誰が入院することになるんじや？　みんながわれ達みたいに強いわけじゃあないんじや！」

リンさんが哀しそうに微笑む。

「エサになるのはわたしたちです。文化祭まであと一日。応援団のすべてのコネクションを使ってサムライボーイズを探します。しかし応援団が校外にいるあいだ、誰かが校内を守らねばなりません。本当はそれを生徒会や、有志学生にお願いしたかったのです。血を流すのはわたしたちだけで十分です」

クガはふーっと深いため息をついて、どっかりとステージの上にあぐらをかいた。

頭をガリガリとかくと、応援団から目をそらすようにして再び口を開いた。

「シユカ、リン、われ達を文化祭中止の会議に呼ばなかったなあ、今回の襲撃事件に関して、応援団が信頼がおけんと判断したからじや」

シユカのとび色の瞳が凍りついた。

ステージを取り巻く学生から、どういふことだ……という困惑のざわめきがおこる。

「応援団の活動にゃあ、たくさん成果がある反面、そのイリーガルな手段から恨みを買うことがあるんじゃない。われ達が解決した事件の加害者からも、3件の訴状が届いとるんを知っとるか？ いままでわれ達がぶつつぶしたり、ケンカをしてきた敵たちが、この事件の裏にいないと言い切れるんか？ われ達の存在が、新たな暴力を呼びよるっちゅーこたあない、と言えるんか？」

タケオの頭に、部室でリンさんと話したときの沈んだ表情が浮かんだ。

周囲のざわめきは、波紋を描きながら集まった生徒達に、不安を伝播して行く。

「……今回の一連の事件じゃー、応援団が厳戒パトロール体制を引いておきながら、すべての犯行現場で犯人を取り逃がしとる。ほいで、犯行声明文にわしが読みあげなかった箇所がある、みんなにゃー聞かせとおなかったんじゃない」

クガはゆっくりと足下の8枚の紙切れを集めて、並べ直した。

「いっちゃん最後の文の後に、続きがあったんじゃ。『??われわれを見つけることはできない。蟲どもの中にも我々の仲間がいる。おまえらが団長と呼んでいる女だ』……シュカ、われは、ほんまにわしたちの仲間なんか？ わしたちやー、応援団を信じてええんか？」

シュカが切れる、と思った瞬間、ノアが猿のようなすばやさで、ステージに飛び乗った。

言葉にならない叫びをあげてクガにおどりかかる。

紙片をにぎったまま動きを止めた副会長が目をつぶった瞬間、その突進がぴたりと静止した。

ハルカと、エミリーが、ノアの腕を間一髪で捕らえている。ぶるぶると震えるノアの目から銀色のしずくがこぼれ落ちた。

シュカがかたまっている副会長の前まで、ゆっくりと歩いてきた。

「団員が無礼をしたな。すまなかった」

クガが額の汗をふいた。

「わしゃあこの情報を信じとうない。わかってくれ。じゃが今応援団を動かすんはリスクが多過ぎるんじゃ」

「あたしが、原因どころか、疑われているってわけか……」

赤毛のパンクヘアーをゆっくりとまわして、シュカは言った。

「リン、団長代行を務めろ」

「シュカ姉！」

ノアが泣きながら叫んだ。シュカが胸元から、くしゃくしゃになった白い封筒を出して、クガの前に置いた。

「退学届だ。預かれ。あたしはすべての武器を返す。でも他の団員の権限を停止したりしたりしはしないでくれ」

低いシュカの声に、副会長が顔を上げた。

「あたしが、この事件に関わっていないのことを信じられるのは、

あたしだけだ。ただあたしが原因になって襲うやつがいるってのもハズレじゃないだろう。ここからは、星くず学園の生徒ではなく、ひとりの人間としてサムライボーイズを追うよ」

立ち上がって学ランを脱ぎ捨てたシュカは、まだ若く、傷つきやすい女の子に見えた。

ノアがよろよろとシュカに近寄ろうとした。ハルカとエミリーも目が真っ赤だ。

「ついて来るな」

シュカは背中越しにノアを止めると、リンさんに学ランを渡した。集まった生徒をぐるりと見渡す。

タケオと目が合うと、かるく謝るような手刀を切って、バイク置き場の方へと去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8315h/>

星くずレッドサマー

2010年10月10日13時36分発行